

春嶽公記念文庫解説目録

保存

復刻
三
卷

本
可
心
譜
尚

春
嶽
公

春
嶽
公

春
嶽
公

春
嶽
公

五

五
能
正

五
能
正

—文書編—

春
嶽
公

春
嶽
公

春
嶽
公

目

春嶽公記念文庫解説目録

— 文書編 —

福井市立郷土歴史博物館編

はじめに

昭和四十五年十二月、松平永芳氏（現福井市立郷土歴史博物館長）の申出により、松平家の「春嶽公記念文庫」は福井市に寄贈され、「福井市春嶽公記念文庫」が誕生した。

文庫は、市条例によって、その呼称を踏襲して永久に保存すると共に、学術文化、教育等のために有効に活用する旨約束された。

右約束に基き、文庫の内容を逐次明らかにして、研究、利用者等の便宜を計ろうと作成されたのが、この文庫解説目録―文書編―である。後日、引続いて什器編が刊行される予定であるが、取り敢えず本目録によって文庫内容の一端が理解されれば幸いである。

昭和四十七年三月

福井市教育委員会

凡 例

一、本解説目録は「福井市春嶽公記念文庫」の史資料を文書、什器の二類に大別し、その内の「文書」の部を更に一、記録。二、古文書。三、典籍。

四、絵図・写真類の四項目に細分してある。

一、各区分中には適宜人物別に分類した箇所がある。

一、本目録の記載順は、名称、員数、解説とし、解説欄は作者（著、編、筆者名を含む）・材質の順に記し、必要に応じて序文・奥書などを原文のまま引用、更に（ ）を付して内容、由緒説明などを加えてある。

一、各史料の形量については、本館総合目録にこれを譲り、本目録ではそれぞれ
の史料の解説に重点を置いた。

参 考 註 記

「春嶽公記念文庫」について

安政五年七月（一八五八年）、時の大老井伊直弼と政治上の意見を異にした福井第十六代藩主春嶽松平慶永公は、幕命によつて隠居謹慎を命ぜられ、藩主の座を退いた。

代つて大老の推した糸魚川松平家の直廉公が養嗣子として迎えられ、第十七代藩主松平茂昭公となった。尚、第十八代康莊、十九代康昌両氏を経て現当主は宗紀氏であるが、これが福井松平家の家系である。

これより先、明治十五年に隠居たる春嶽公の実子として誕生した松平慶民氏は、既に福井松平家の後継者が確立して久しいから、改めて自分が本家を相続する必要なしと、十八代康莊氏の順養子として本家の相続人としようとする大勢を固辞して、明治末期に、別に一家を創立して独立した。

これがため松平本家に於ては、春嶽公の遺命にもとづき、公の遺文、遺品、拝領、受贈品等、公一代限りの物件一切を慶民氏の手に移管し、その保護、継承を託した。

ここに於て氏は、大正六年、東京麻布の邸内に「春嶽公記念文庫」を創設し、その父君である公を中心とした維新史料を後世子孫の為に積極的に整理保存することと、明治四十四年に文部省内に設置された「維新史料編纂会」の編纂事業を側面から支援することに努力を傾注し、多大の成果を収めて昭和二十三年に他界した。

その嗣子永芳氏（現郷土歴史博物館長）は、第二代文庫主として、戦後の混乱時代に於ても収蔵品を散佚することなく、よくこれ等の保護につとめ、昭和二十八年福井市立郷土歴史館が創立されるや、その一部を更に、四十二年以降はその大半を寄託し、四十五年館付属の史料収蔵庫が完成するに及んで右文庫を福井市に寄贈した。福井市に於ては、文庫名を踏襲し、これを永久に保存し、学術、文化、教育の資として活用する旨を市条例により決定し、ここに「福井市春嶽公記念文庫」が誕生した。

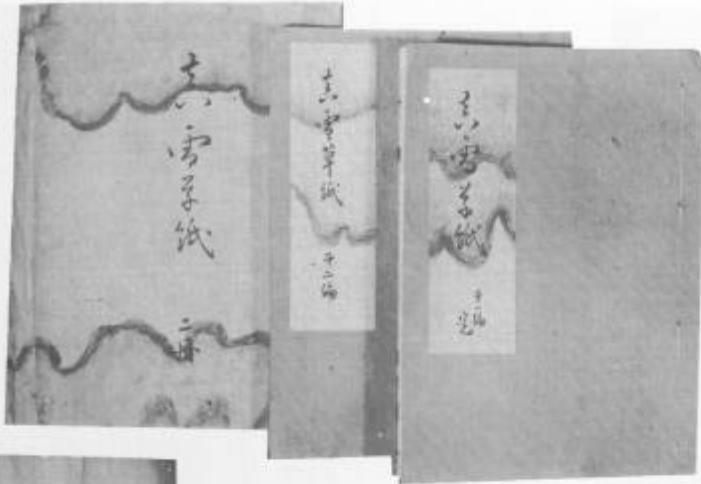
以上が文庫の概要であるが、まことに遺憾なことは、大東亜戦争末期に、福井の安全を期待して東京から福井神社宝物館に疎開された文庫収蔵品の一部が、かえつて戦火により烏有に帰したことがある。

目次

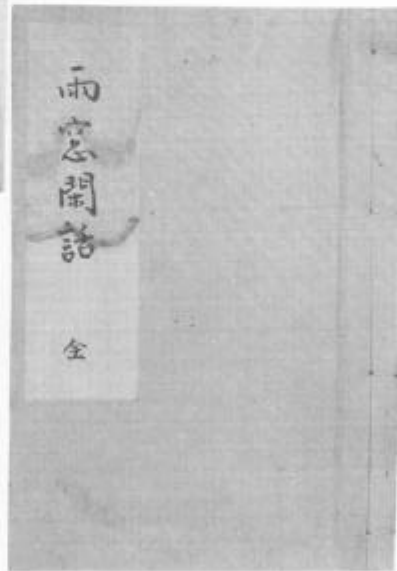
一、記 録	一〇三
二、古文書	三三〇七五
三、典 籍	七七〇九二
四、絵図・写真	九三〇九九

一、記
録

記
録



真雪草子



雨窓閑話





閑窓乘筆

吾堂末葉下月、昔の筆致をみるに、人々のきつとよせりて、
斯くも、
...

...



經訓論說

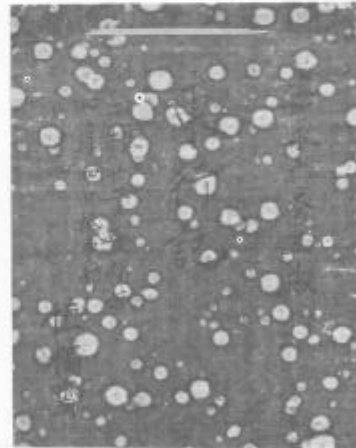
不嗜殺人者...
...



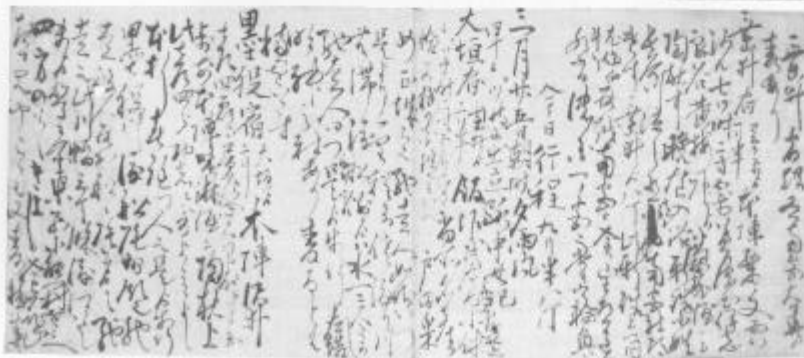
幕儀参考稿本



幕儀参考



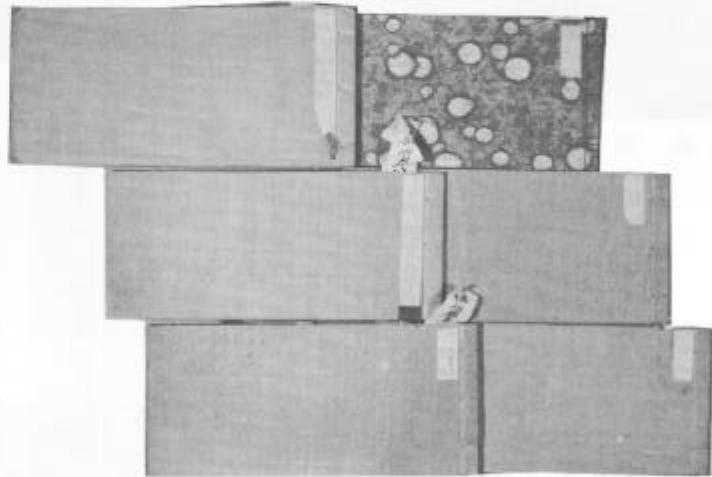
東行記





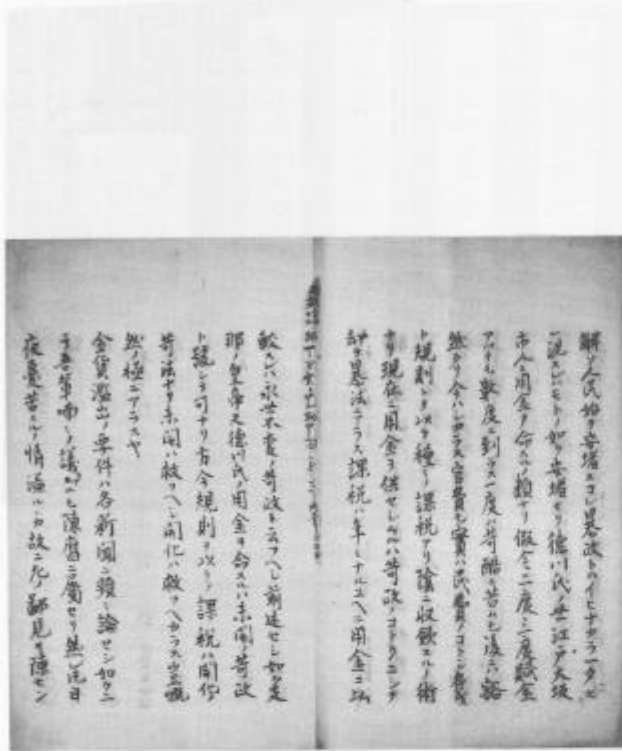
東海道駅路紀行草稿

Handwritten text in cursive style (sōsho) from the manuscript. The text describes a journey, mentioning '足利' (Ashikaga) and '松平定頼' (Matsudaira Sadayoshi). The characters are written in black ink on a light-colored paper.

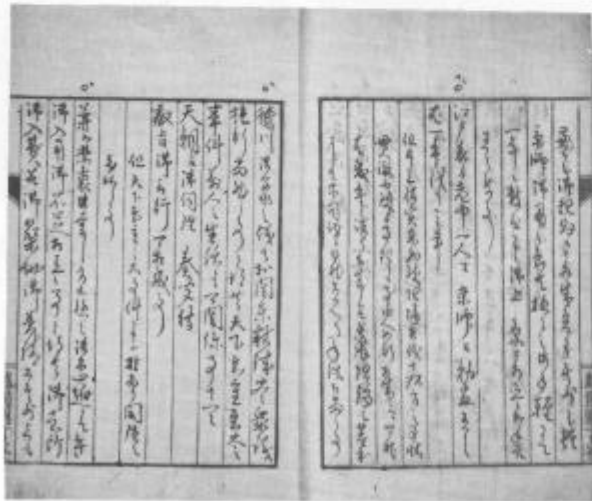


登坂心覚

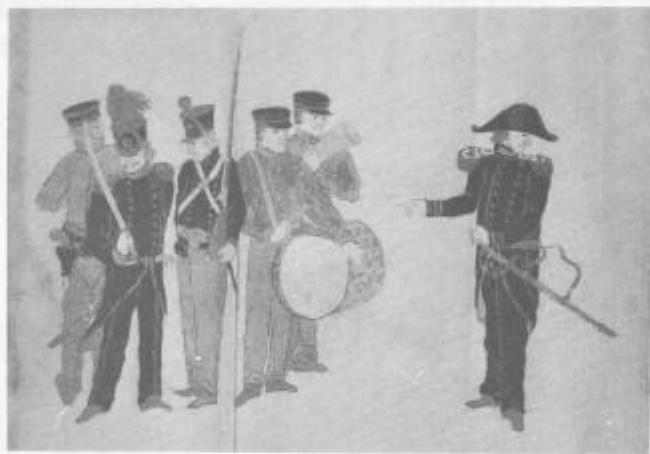




憲 法 論



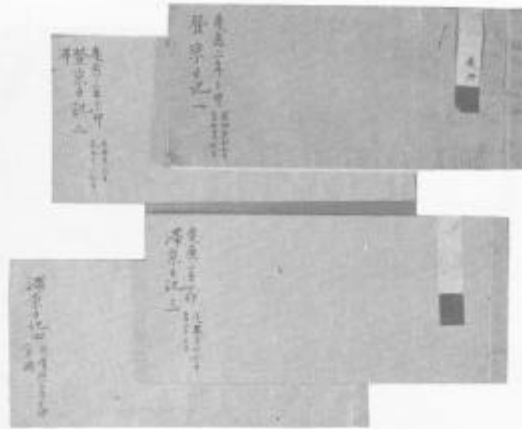
虎豹変革備考



則太平之風習不亦弊風乎車然起發孰能禦之然
 則攝御常例昔實而竭心豫防豫防完全堅固則
 雖百莫能渡來証足其歡余於此記所以起春王
 第一日也矣
 于時嘉永七年龍泉閣逢攝提格春王正月九日
 越前中將源朝臣廣永標伴書

合同船入相秘記卷之一
 嘉永七年甲寅春正月九日西曆一千八百二十四年
 正月第九日此書其相秘合同國語之獨立建國以文正
 九年

合同船入相秘記



登(滞)京日記

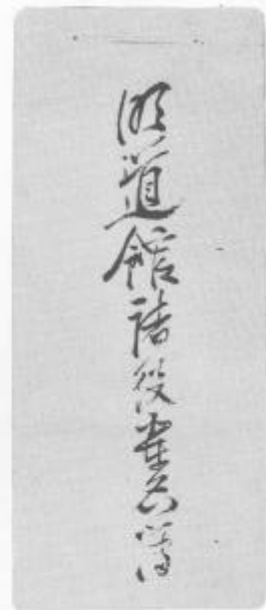


小型洋手帖類





明道館諸役輩名簿

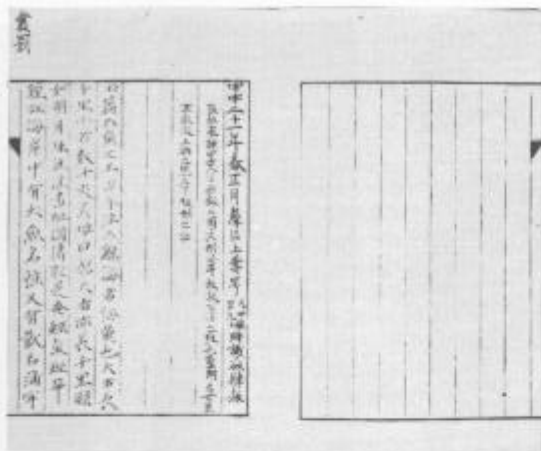


館務私記



安政丙辰（3年）式月日録
（江戸遊学中の日記）





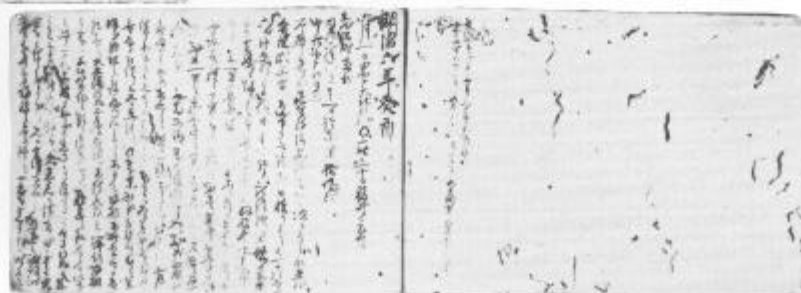
景岳割記丙集 史学日涉



景岳先生手帖



中根雪江 松陰日記



賜從四位
酒井清科日記

心
酒井清科日記

賜從四位
酒井清科日記

酒井十之丞日記

酒井十之丞日記
寛政十一年...
酒井十之丞日記
寛政十一年...
酒井十之丞日記
寛政十一年...

古文書

慶長... 松平定信書翰

私田安土藩田臣佐野玩明一拜啓
 明治廿五年六月廿
 慶永十七

松平定信書翰

松平定信書翰

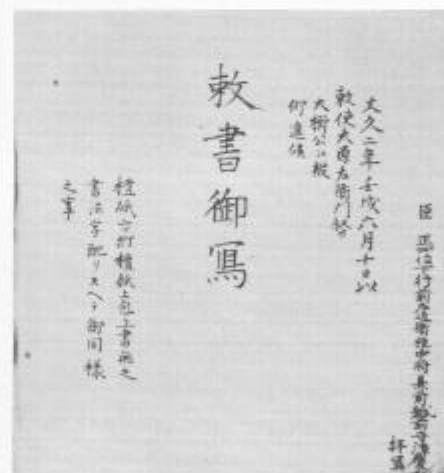
宛行宛分年
 右方和信と授賜紙
 今之願望の切紙
 松平忠直

松平忠直黒印宛行状

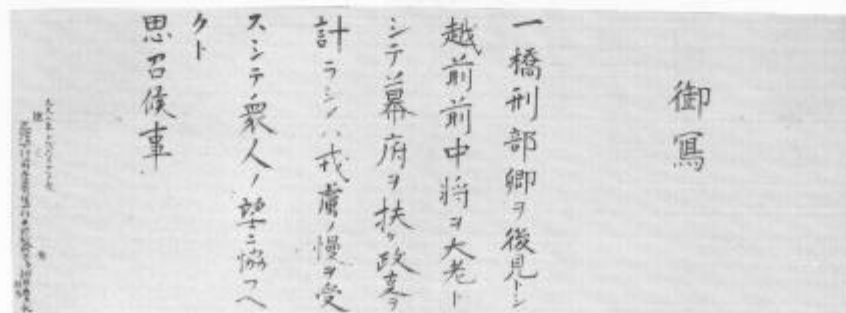
宛行宛分年
 右方和信と授賜紙
 今之願望の切紙
 松平忠直





田安齊匡書翰





文久2年6月 勅書写



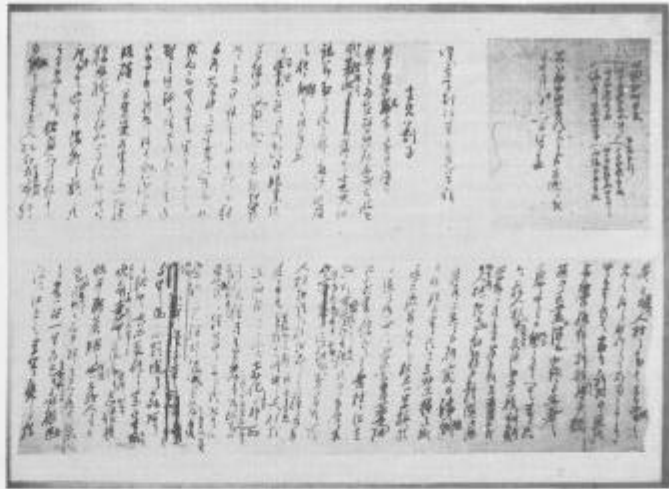

 從位行民部卿兼大藏卿源朝臣慶永
 任大學別當
 右大臣從一位藤原朝臣實美宣
 大辨從三位藤原朝臣俊政奉行

 明治二年己巳八月廿四日

任大學別當兼侍讀
辭令

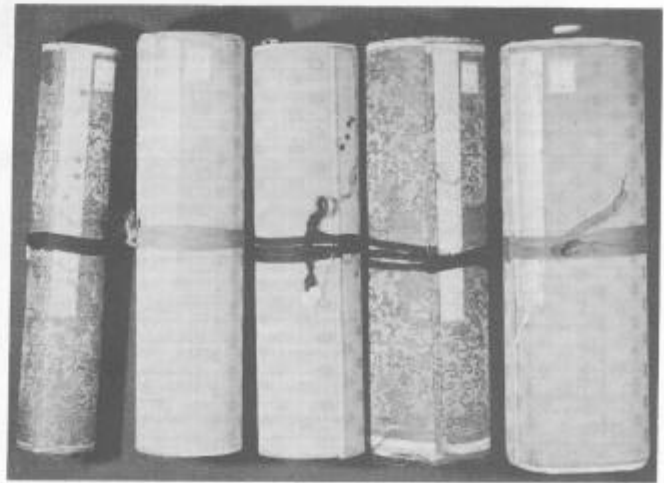

 從位行大學別當源朝臣慶永
 兼任侍讀
 右大臣從一位藤原朝臣實美宣
 大辨從三位藤原朝臣俊政奉行

 明治二年己巳八月廿四日

越前宰相
 議定職内國事務
 局輔政
 仰出共事
 慶應四年二月
 總裁

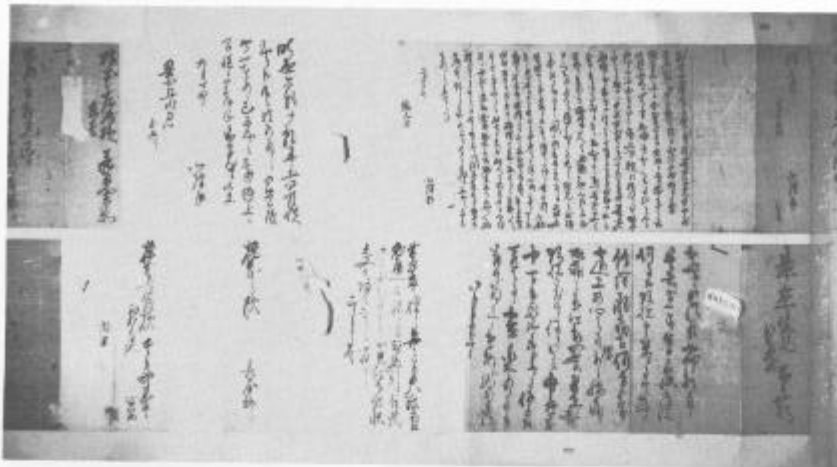

總裁（有栖川宮熾仁親王）朱印状



景岳橋本先生書翰帖
(帖内容の一部)



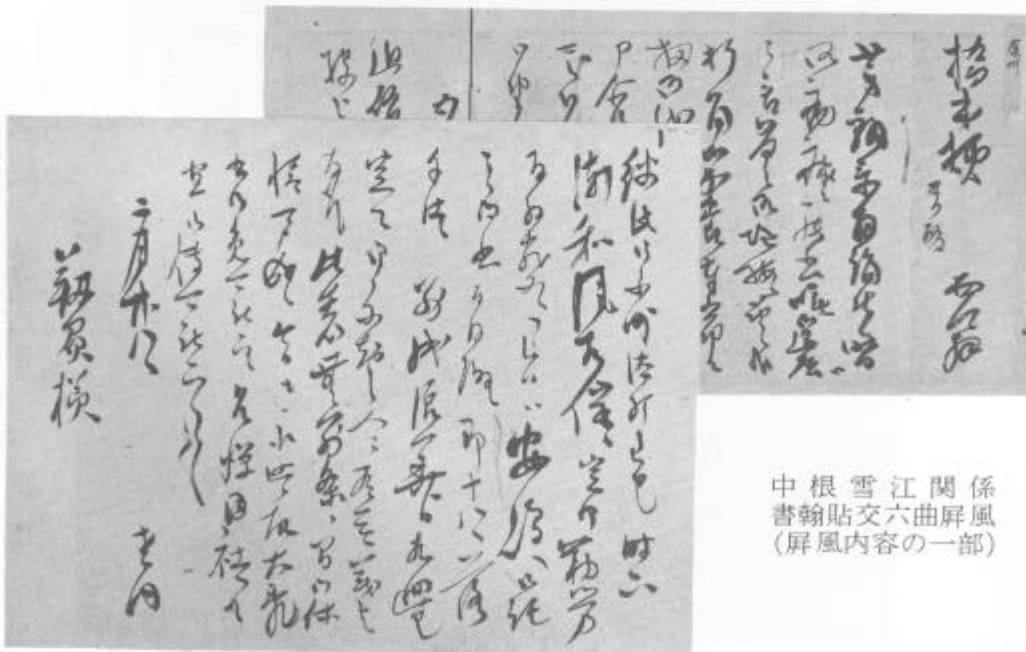
橋本左内関係書翰巻軸



(巻軸内容の一部)



(同上)



中根雪江関係
書翰貼交六曲屏風
(屏風内容の一部)

グリフィス博士雇備
契約書

... or other means, & make a return to
them, the number of days, that shall be
deducted from his salary.

1st That Mr. William C. Griffin is to be allowed,
either out from all teaching or studying that
is made on each week, off from his salary,
but only for such days as shall be proved, and
not to exceed 10 days in each month.

signed } On the last authority of the
William C. Griffin.

The contract begins on the third year of Meiji,
but the month, with days from 26/11/1871, and ends
on this year.

This Agreement witnesseth that by
and by agreement, as witness before of the
local authorities of Yonkuni, and the
local authorities of Griffis at contract as follows:

1st That Mr. William C. Griffin is to be
named as a Professor of Philosophy, and
to teach Philosophy in the college at Yonkuni.

2nd That the local authorities of Yonkuni
are to furnish Mr. William C. Griffin with
a house built on Japanese style, but the
purchase thereof, and all expenses there
on to be at his own expense.

3rd That the salary to be paid to Mr. William
C. Griffin is to be at the rate of \$3000
per month; that is \$36000 per year, payable
at the end of each Japanese month. The last
year the salary shall be \$3900.

4th The salary of Mr. William C. Griffin shall
be paid in cheques or bills, as he may desire.

5th The contract is to begin on the third year
of Meiji, on the eighth month, with the
day 26/11/1871, and the contract shall
continue until the eighth day of the eighth
month of the third year hereafter.

6th If the local authorities of Yonkuni
shall, by reason of internal troubles or
other causes, or for other reasons, be
unable to fulfill the contract before the

此禮可謂大行の功徳也
...
徳川家茂書翰
...
明治十二年六月
...

徳川家茂書翰

山内容堂書翰
...
明治十二年六月
...

山内容堂書翰

新居... 橋本左内... 三月... 遺墨... 鳴... 志... 大... 其... 和... 國... 我... 三... 下... 曾... 高... 履... 亦... 可... 平... 若... 月...

三友遺墨

内... 橋本左内書翰... 三月... 遺墨... 高... 亦... 可... 平... 若... 月...

(三友遺墨中の橋本左内書翰)

典籍

佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經

佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經

佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經
 佛說經論集略記教誡經

佛說經論集略記教誡經



牛頭天王曆神辯

伊吹道隆先生及門人著述對成之書目 整理版

○古史成文 神代部 三卷	○古史成文 神代部 凡五卷
○古史成文 神代部 六卷	○古史成文 神代部 一卷
○古史成文 神代部 一物	○古史成文 神代部 一物
○古史成文 神代部 一物	○古史成文 神代部 一物
○古史成文 神代部 一物	○古史成文 神代部 一物
○古史成文 神代部 一物	○古史成文 神代部 一物
○古史成文 神代部 一物	○古史成文 神代部 一物
○古史成文 神代部 一物	○古史成文 神代部 一物
○古史成文 神代部 一物	○古史成文 神代部 一物
○古史成文 神代部 一物	○古史成文 神代部 一物

伊吹道隆先生及門人著述對成之書目 整理版

牛頭天王曆神辯

伊吹道隆先生及門人著述對成之書目 整理版

伊吹道隆先生及門人著述對成之書目 整理版



俗神道大意



福沢諭吉自著献呈本

一、記 録

一、越前国福井領産物覚

二冊

荒川惣右衛門 紙本墨書

第一冊表紙「越前国福井領産物 松平兵部大輔留守居 荒川惣右衛門」同奥書「右者御本懐之趣を以、産物之品々如^レ斯御座候、以上 享保二十乙卯年」第二冊表紙「越前国之内御領知産物 松平兵部大輔留守居 荒川惣右衛門」

松平春嶽関係

一、真雪草子

二冊

松平春嶽 紙本墨書

上巻奥書「明治十四年八月廿四日にしるし畢ぬ 慶永（花押）」下巻奥書「明治十六年十月十六日畢 正二位勲二等源よし永（花押）」書あやまりよめかねる所もあるへし、見る人推読せよ」

（松平春嶽が、常侍の臣浅井八百里・中根雪江・天方孫八などから聞いた領国越前や福井歴代藩主の故事逸話を随想風に集録した自筆本である。松平春嶽全集所収。）

一、雨窓閑話

一冊

松平春嶽 紙本墨書

奥書「おもしろくもなければ、余か心に覚たるたけを書つらねたり、拙き文章をとかめすして、見給へよかし、明治十八年五月三十日著し畢 正二位まつ平慶永（花押）」

（松平春嶽が、將軍・諸侯・諸学者にはじまり著名な画家・歌人・役者、更には西欧の皇帝など広範囲な人々の奇行逸話を叙述した自筆本である。松平春嶽全集所収。）

一、前世界雑話稿本

一冊

一、閑窓秉筆

松平春嶽 紙本墨書

序文「前世界雜誌稿本 源慶永述 前世界ト云ヘバ古代ノコトク思ハル、明治ノ聖代ヨリ見レハ徳川時代ハ前世界ナリ、余ノ胸中ニ記憶スルノ事ヲ記シテ新世界ノ衆庶ニ示ス、余ノ頑固ヲ笑フコトナカレ、干_レ時明治十九年八月十一日 正二位源慶永記ス」(松平春嶽全集所収)

一冊

松平春嶽 紙本墨書

序文「昔の事を今はしる人なきかゆへに昔のはなしをなさんと思へとも、老たるものと若き人のはなしのあはさる事ハたれもしれるか如し、おのれ五十の坂を越て六十路にちかし、塵の世をのかれて山住にすむ心地し、雨ふる夜はいとくつれくくなるをもて、いとけなき頃より見聞する事ともを拙き筆にまかせて、後の世の鑑となるへきを書しるし侍る也、見る人ハ笑ふ事もありかなしき事もありうれしき事もありて、夏の長き日秋の長き夜などにより給はハ、なくさみにもなるへし、たた我拙きかきようを笑ハすして推はかりて読み給へかし 明治十六年十月十九日 羊堂散人春嶽しるす」(松平春嶽全集所収)

一、筆子略伝

一冊

松平春嶽 紙本墨書

序文「比略伝ハ幼年ヨリ記憶ノ俣ヲ記載シテ諸君ノ覽ニ供ス、モトヨリ愚筆愚文ヲ推読セラレントヲ希フ、文中ニハ欠敬ノコトモアリ海涵セラレントヲ乞フ」

奥書「明治十九年五月 松平慶永」(筆子は田安齊匡女、松平春嶽実妹)

一、慎独齋雜録

一冊

松平春嶽 紙本墨書

一、春秋吟・住吉百首

奥書「弘化三年丙午春正月 源慶永識」(松平春嶽が、天保十四年から弘化三年に至る間〔十六才〜十九才〕に筆をとった随想類をまとめて一編としたもの。)

一冊

松平春嶽 紙本墨書

奥書「此春秋吟と住吉百首の一冊はわか大伯父白川少将樂翁君の歌なり、こたび鈴木重嶺よりかりうけて、みつからうつしたり、今としの九月三十日に筆をとりそめて十月九日にうつし畢りぬ 松平よし永(花押) 明治十三年」

一冊

松平春嶽 紙本墨書

奥書「過去ヲ以テ現世ニ比較シ現世ヲ以テ未来ヲ洞觀スルノ徵衷ヲ述フルマテノ精神ナリ、決テコレヲ同志ノ友人ニ示スニアラス、モシ後來ノ人コレヲミテ贊助ニ供スルコトモアラハ余ハ幸ナリ 明治十五年二月一日 潜思閣主人守拙老逸」

一冊

松平春嶽 紙本墨書

奥書「明治九年七月 松平慶永」(この書は、桃太郎の鬼退治の物語に松平春嶽が注釈を施したものである。但し、巻頭には「玄々秘伝」とあって、幼年の者を対象にしたものではなく、神道・儒学など春嶽の博識を傾注した訓戒の書である。)

一冊

松平春嶽 紙本墨書

序文「慶応元年乙丑夏閏五月、大君親率数万軍欲討毛利氏之罪、發燕城(中略)幕府下、令征討期已在近、余因欲問大君安否且建言区々鄙衷而以十月朔登程、此日風雪粉々寒氣徹骨行路艱難不可言也、余在轎内徒擁火炉而已者作問安行記聊備」

一、問安行記

一、伐鬼伝

一、三世思考

一、羽江浮舟之記

一冊

異日遺忘、非敢示他人也、是為「序」
(慶応元年八月付の秋月種樹の跋文が付されている。)

松平春嶽 紙本墨書

(嘉永五年八月、福井城下足羽川での舟遊びの記録。)

一、文久壬戌天使浜園遊覧記

一冊

松平春嶽 紙本墨書

奥書「公の事しけくた、ありのままをあらましにかきつけぬるになんありける 文久二年壬のいぬ葉月十日あまり六日 政事総裁職源よし永しるす」

(文久二年八月十六日、勅使大原重徳を浜御殿で接待した際の記録。文中朱筆にて加削あり。加削者不詳。橘曙覧か。)

一、須田の草子

一冊

松平春嶽 紙本墨書 著作年代不詳

(恵のはなし、風雅の興、名高き士のはなし、人々のこのみ、友に交ること等十五ヶ條の随想集。文中朱筆にて加削あり、加削者不詳。橘曙覧か。)

一、慶永幼稚履歴記憶録

一冊

松平春嶽 某氏写 紙本墨書

奥書(付箋)「此ノ慶永御幼稚履歴書ハ写ニシテ元書ハ卿ノ御直書ナルヲ以候爵御夫人節子君ノ御手許ヘ指出シ御保存有之様ニ申上置候 明治四十三年十一月 準道」

(付箋の筆者は、旧藩士鈴木準道。この書の原本は、本項に別に収載してある。写本ではあるが表紙の題字は春嶽自筆である。)

一、伊香保旅行記事稿

一冊

一、自讃歌

松平春嶽 紙本墨書

(明治十八年八月二十日より二十四日にいたる群馬県伊香保温泉方面への旅行日記。)

一冊

松平春嶽 紙本墨書

奥書「余有_レ病不_レ参朝又不_レ参大学手漏遅々仍写_レ此本此本大学所蔵也治午五月二十四日源慶永識」

(式子内親王、後京極摂政、前大僧正慈円、権大納言通光などの秀歌十首づつを選び、二百七十首を書写したもの。)

一冊

松平春嶽 紙本墨書

(慶応元年七月、越前三国港への旅行記。)

一冊

松平春嶽 紙本墨書

奥書「此書ハ東海道之歌ニテ不_レ願鄙陋色々之書籍より拔萃し□綴り弘化四丁未睦月のはしめより弥生之十七日にいたりて成業、これ草稿と同じ、依_レ之於_レ東都改テ浄書するもの也 源慶永しるす(花押)」

一冊

松平春嶽 紙本ペン書(洋紙)

奥書「明治四年辛未四月上澁改正」

(官順便覧、官位相当便覧など心覚えのために抜萃書写したもの。)

一冊

松平春嶽 紙本墨書

一、経訓論説

一、竹芝の遊覧記

一卷

（天保十四年十月より同十五年七月にいたる松平春嶽〔十六才・十七才〕の論説集。一例をあげれば「学者 愚按スルニ近年世上ニオイテ申スニハ、書物ヲ少シ読候ヲサシテ学者ト云、或ハ形カタチヲモカマハズ、カタクナニキタナキ者ヲサシテ学者トモ云、春嶽ニ於テハソレヲ学者ト云カタシ、学者ト云ハ必聖賢ノ道ニ本ツキ仁義五常ヲヨク取守り候テ真実ニナリ、ツイテハ聖賢ノ場ヘモ至り候ヲ学者ト云、尤モノヲ節儉ニ致シテ宜シキモノモアリ、又名聞ニイタスノモ有^レ之一様ニ云カタキナリ天保十四癸卯歳」などとなり、文中随所に近臣浅井政昭の朱筆添削が施されている。）

松平春嶽

紙本墨書

（巻紙未表装）

一、言葉廼下草

一冊

（前提「天使浜園遊覧記」と同文であるところから、その草稿本と思われる。朱筆加削あり、加削者不詳。橘曙覧か。）

松平春嶽

紙本墨書

（十七ヶ條にわたり、大和言葉、万葉古今などの和歌の道について説いたもの。詳細は不明であるが、誰かの質問状への回答とも思われる。著作年代不明。）

一冊

一、唐土歴代

松平春嶽

紙本墨書

奥書「春嶽（印） 右□増唐土歴代書於磐邸」

（三皇五常にはじまり、清の高宗純皇帝にいたる唐土歴代の帝王名と略歴を付記したものの。書体から十代前半のものと思われる。）

一冊

一、襲封前録

松平春嶽

紙本墨書

一、幼稚履歴記憶録

（松平春嶽が、文政十一年江戸田安邸に生れ、天保九年十一才で越前松平家を相続するまでのことを叙述した自伝。巻末に松平家を襲封した際のことを記して「距、今二十九年日月如流独懐感慨耳」とあって、執筆の時期が知られる。）

一冊

松平春嶽 紙本鉛筆書 (洋紙)

（前提「慶永幼稚履歴記憶録」の原本。誕生から二十代に至る頃までの自叙伝である。）

一、勅奏任官待遇書

二葉

松平春嶽 紙本墨書

（明治初期と江戸期の官位を対比し、その待遇の差異を記したもの。）

一、開国始末愚考

一冊

松平春嶽 紙本墨書

（詳細は不明であるが、開国関係の著述の原稿を示された春嶽が、その内容を検討して訂正すべき箇所を箇條書として送付したものである。執筆年代不詳。）

一、幕儀参考稿本

一冊（二冊合本）

松平春嶽 紙本墨書

奥書「明治十三年三月 松平慶永（印）余疎漏錯雜ナレト記憶ノママヲ記載シ、仰キ願クハ斧正スルノミナラス、コレヲ基本トシテ誤謬ヲ正クシ、文体ノ簡潔ナランコトヲ、
不」

（松平春嶽は、明治十一年秋、朝廷よりの内命によって、伊達宗城・池田茂政とともに「徳川令典録」三十九巻を編纂したが、その参考に供せんとして、自から執筆したのがこの稿本である。松平春嶽全集所収。）

松平春嶽 某氏写 紙本墨書

〔前提「幕儀参考稿本」を、家士に書写させ、池田茂政に送付し、茂政がこれに朱筆で付箋を加えたものである。猶、松平春嶽全集に収録されているのは、本書を更に春嶽自身が書写したもので、この方は戦災に焼失した。松平春嶽全集所収。〕

一、海山紀行編

一冊

松平春嶽 紙本墨書

序文「東海行程記 源慶永述 癸丑（嘉永六年）之春慈遵先世之旧典將復朝江都乃以三月廿二日上道所経歴凡八州一百三十里六十八駅十二舍而始達江都於是其間自山川勝絶之地古昔千才之処以及沐雨櫛風小大干邁之況雖則才乏ハ斗吟恥七步聊且茲賦詩歌以遣客懷者録以不敢示人即付詞臣刪正云尔」

一、安政丁巳東海紀行

一冊

松平春嶽 紙本墨書

〔安政四年四月、福井より江戸への道中紀行文。書中、井上文雄の朱筆で加削あり。〕

一、天保甲辰東海紀行

一冊

松平春嶽 高野進書写 紙本墨書

奥書「右弘化二年乙己之春奉命謹書之 臣高野進」

〔天保十五年四月、二度メの福井入国に際しての江戸より福井までの道中紀行文。書写した高野進は、福井藩儒学者。〕

一、東行記

一冊

松平春嶽 紙本墨書

奥書「弘化の丁未のとし旅の道すからつたなきを顧すしてよみたるを 源よし承しるす
（花押）」

一、東海道駅路紀行草稿

一冊

(弘化四年三月、福井より江戸までの道中紀行文。)

松平春嶽 紙本墨書

表紙上書「甲辰帰国 東海道駅路 紀行草稿 從江戸至越前国 慎独齋(花押)」

(弘化元年四月二十九日江戸を出発し、五月十日福井に到着するまでの紀行日録。)

一、東山道路記

一冊

松平春嶽 紙本墨書

表紙上書「弘化三年丙午四月二十八日ヨリ 東山道路記 自武蔵之国江都 至越前之国

福井 越前守慶永(印)」

(弘化三年四月二十八日江戸を出発し、五月十一日栃木峠をこえるまでの紀行日録。)

一、東山日録

一冊

松平春嶽 紙本墨書

表紙上書「嘉永紀元五月五日 東山日録 從信濃国塩尻駅 至福城 源慶永」(嘉永元

年五月、塩尻より福井までの道中日記。)

一、東山日録

一冊

松平春嶽 紙本墨書

表紙上書「嘉永紀元戊申仲呂念八発 東山日録 從武蔵国江都 至我越前国福城 正四

位下左近衛権少将兼越前守源慶永(印)」

(嘉永元年五月、江戸より塩尻峠までの道中紀行文。)

一、東山日録

一冊

松平春嶽 紙本墨書

表紙上書「嘉永二年歳次己酉三月念三発福城 東行日録 從越前国足羽郡福井 至武蔵

国豊嶋郡江都 羽林次将源慶永」

（嘉永二年三月二十三日より四月六日にいたる、福井江戸間の道中日録。）

一、東山道中日録

一冊

松平春嶽 紙本墨書

帙上書「嘉永三庚戌年 東山道中日録」 表紙上書「嘉永庚戌孟夏念八発途 中山道旅
中日記 従武蔵国豊嶋郡江都」

（嘉永三年四月廿八日江戸を出発し、五月十二日湯尾峠をこえるまでの道中日録。）

一、東行日記

一冊

松平春嶽 紙本墨書

表紙上書「参観 東行日記 嘉永四年歳次辛亥春三月廿二日登程 慶永」

（嘉永四年三月廿二日福井を出発し、四月六日神奈川宿へ到着するまでの道中日録。）

一、東行記

一冊

松平春嶽 紙本墨書

表紙上書「嘉永六癸丑歳 東行記 三月廿二日発福城 四月四日抵東都 慎独齋」

一、雲月紀行

一冊

松平春嶽 紙本鉛筆書

（松平春嶽は、明治十年一月十七日、明治天皇の行幸に供奉して大和・京都方面に出発
五月十八日供奉御用済となったが、それより先祖墓参のため福井へ赴き、六月十四日東
京に帰着した。この紀行文は、その間明治十年二月廿三日より三月廿四日にかけてのも
ので、横長洋手帖に鉛筆で記録されている。）

一、上京手控・刀鏢紀行

一冊

松平春嶽 紙本鉛筆書（一部墨書）

一、登坂心覚

(慶応三年三月二十四日、朝廷より上京を命ぜられた松平春嶽は、四月十二日福井を出発、京都において山内容堂・伊達宗城・島津久光とともに、長防の処置・兵庫開港問題等について討議、八月六日まで滞京して福井へ帰国した。
上京手控は、この間四月廿四日から七月廿三日にかけての覚書であり、刀鏢紀行は、八月六日京都を出発して同九日福井に到着するまでの道中日録で、縦長洋手帳に記録されている。)

六冊(一帙)

松平春嶽

紙本墨書

(慶応二年五月、長州再征の議なるや、幕府は五月二十八日松平春嶽に上阪を命じ、將軍家茂も大阪に移った。春嶽は再征の非を上申しつつ六月二十五日福井を出発、途次京都に立寄り七月十七日大阪に到着した。これより京阪の間を盛んに往復して長州再征の非を訴え、十月六日ようやくにして福井に帰着している。
これは、この間慶応二年六月一日より九月三日にかけての日記である。)

一、東道紀行草稿

一冊

松平春嶽

紙本墨書

表紙上書「弘化四丁未年三月十九日発 東道紀行草稿 從越前福井 至武蔵江都 慎独齋(花押)」

(弘化四年三月十九日福井を出発、四月一日江戸に到着するまでの道中日録。)

一、東海日録草稿

一冊

松平春嶽

紙本墨書

表紙上書「弘化二乙巳年参観 東海日録草稿 從越前国福井 至武蔵国江都 慎独齋(印)」

一、松平春嶽自筆記行文残簡
七枚
(弘化二年三月廿一日福井を出発、四月四日戸塚到着までの道中日録。)

松平春嶽 紙本墨書(一部ペン書)

(1)年月日不詳、木ノ本より福井までの道中日記一枚 (2)前提「雲月紀行」未綴残簡
五枚 明治十年一月十七日より二月七日まで (3)「滞西日録」未綴残簡 一枚 明治十
年二月十七日より二十四日まで。)

一、憲法論

一冊

松平春嶽 紙本墨書

(内題には「国憲論」とある。我国の正しい国体と政体について論じたもの。松平春嶽
の晩年の論説として貴重なものである。)

一、幼年記録

一冊

松平春嶽 紙本墨書

(七才より十四・五才までの日常の生活を追想しつつ記録したもの。)

一、虎豹変革備考

一冊

松平春嶽 紙本墨書

本文目次「覚 一公武御一和之事 一衰季挽回維持之事 一芟去幕私事 一大攘夷策之
事 一救天下之困弊之事 一武備張宜之事」

(松平春嶽の会議政治論として重要な論述である。記述の時期については、文久三年十
二月下旬より翌年二月末頃とする河北展生氏の意見(史学二十九卷四号)がある。)

一、士道大意

三枚

松平春嶽 紙本墨書

奥書「右数ヶ條の趣ハ石上の事にして常々心を用ひ他人より強ひてすすむることにあら

一、新聞秘事

二枚

松平春嶽 紙本墨書

す、やすき事は目上の者の為に枝を折るよりもやすかるへし、必舟なくして海をこゆるかことき無理なる事にはあらずそかし。文久辛酉八月吉日 春嶽しるす」
(松平春嶽が、士道について十八ヶ條にわたり論じたもの。)

一、麟 筆

一冊

松平春嶽(某氏写) 紙本墨書

(明治八年六月十八日、六月二十一日、六月三十日の三條にわけ、新たに見聞した事件を記録したもの。)

一、論説残簡

七枚

松平春嶽 紙本墨書

(「方今天下之形勢累卵之危殆に切迫して太平之命脉阮ニ絶へんとする勢なり云々」と書出し、第一論目的、第二論君徳、第三論委宰臣、第四論宰臣ノ職掌の四條にわけて時局打開の策を論じたものである。論中「去冬より有名之侯伯、朝幕之間に相立って内外尽力周施し幕府再上洛之大典を挙げ給ひ」とか「開鎖未だ定らず殊ニ長州之如き暴逆未だ征服し給ハす」などとあるところから、その述作の時期が知られる。)

一、論 説

三枚

松平春嶽 紙本墨書

全文「天下ヲ治ムルノ至要ハ木ノゴトシ枝葉繁殖ストイヘトモ一幹ノ培養ナ、(ニ在)リ
培養トハ何ソ用ナリ、一幹トハ何ソ體ナリ、仮ニコレヲ言フ如此

第一章

重国体 国体トハ何ソ皇統不朽萬世一系ヲ云

第二章

辨彼我之国体之事 彼我之国体ヲ辨シ彼ノ体ヲ我体トナサザルヲ云、コレヲ第一之幹トス

第三章

彼ノナス所便利至當トイヘトモ、我国体ニ関スルモノハ用ヒサル事 タトヘバ養子ヲ廢
スルノ論洋制至當ナリトイヘトモ、我ニ用ユルトキハ平民華土族一般ノ規則ナレハツイ
ニ 天皇太子ナキトキニ比例ヲ引カスンバアルベカラサレハ国体ノ大關係ナリ、コレラ
ノ類ヲ云フ

第四章

彼ノ所長ヲ我ニ採用スルニ国力ヲ量リ緩急ヲ考ヘテ施設スル事

第五章

兵制ヲ整ヘ兵備ヲ嚴ニスルハ総督ニ一切ヲ委任シ総督ヲ撰フ之事

第七章

西洋ノ国体我国体ト違フユヘニ文明開化ノ域トナルニ從ヒ益綱常ヲ明ニシテ人民ニ忠孝
ヲ以テ奨勵シ禮義ヲ正シ信実ノ意アラシムル事

第八章

洋服ノ上直垂ヲ着スル等ノコト不体裁ナキヨウニ注意スベテコレラノ類ナリ

第九章

祖先父母親族(之)祭怠ラ、(ル可ラ)サル事

第十章

布令ヲ俗ニシ衆人ヲシテ明ニ曉知セシムルヲ（ヘキ事）要ス

Y. N. Matsdira

（第六款所陳^在□現今頂上之一大鍼也不可不祭 西周謹批）
註、部（見消）、（ ）内は西周自筆の未批。

一、論 說

一枚

松平春嶽 紙本墨書

（「最大ノ驕奢ヲ極メタル容堂親友ニテモ薨去ノ後ハ一板中ニ安居スルノミニシテ他ノ者ヲ使フコトヲ自然ニ廢セラレタリ他ノ者モ彼ノ安居スル域ニ到ルコトヲ不得サレハ唯一人ノ住居ノミナリ」と書出して、仏教的な無常觀を論じ、つづいてそれによる自己の生治態度のあるべきすがたを説いたもの。山内容堂歿後、間もなく書かれたものと思われる。）

一、經学素懐

一枚

松平春嶽 紙本墨書

（学問之道に関する所感を儒学的見地から論じたもの。）

一、未来論

一枚

松平春嶽 紙本墨書

（「皇国ノ体ハ実ニ瓊尊ヨリ今日マテ綿々タル皇統ノ万古不易タルハ五大洲ノ卓冠トイフベシ」と書出し、将来の我国の国体についてあるべきすがたを論じたもの。残簡。）

一、合同舶入相秘記

六冊一帙

松平春嶽 紙本墨書

一、礫川文藻

百六十三冊

松平春嶽 紙本墨書

（合同船とは米国の船舶、また入相とは相模国に侵入の意味である。安政元年正月、米
国艦隊が再渡来した際の記録で、米艦の動静、応接の様、越前兵の品川御殿山警固の
こと、諸藩及び侍臣の偵察による情報や絵図などを掲載した詳細なものである。
安政元年正月一日より同年二月二十八日までを記録し、多くは春嶽の自筆、部分的に家
臣の筆写によるところがある。第六巻序文の奥付には「春二月下澣潜思閣主人春嶽書於
南窓下（印）」とある。）

一、登（滯）京日記

四冊

松平春嶽 紙本墨書

（明治八年十月一日より同二十三年五月三十一日に至る日記。礫川文藻とは、春嶽の屋
敷が小石川にあったため名付けられた。各巻は官私備忘・坐右日薄・鴻寄鯉信号録など
と名付けられている。）

一、京都日記

六冊

松平春嶽 紙本墨書

（前掲「上京手控」に解説した如く、松平春嶽は慶応三年三月、朝廷より上京を命ぜら
れ四月十二日福井を出発したが、これはその際の詳細な日記である。慶応三年四月十二
日より六月一日までが記録されている。）

一、記事珠・台省日紙

一冊

松平春嶽 紙本墨書（一部鉛筆書）

（前提「登（滯）京日記」につづくもので、慶応三年五月二十一日より八月四日までの
詳細な日記である。）

一、滞京日紙

(小型洋手帳に記録された日記である。前半部は「記事珠」と題され、慶応三年十一月二日より同十五日まで、後半部は「台省日記第四号」と題され、明治二年正月元旦より同十四日までが記録されている。)

十一冊

松平春嶽 紙本墨書

(慶応三年十月中旬、朝廷・幕府より上京の命を受けた松平春嶽は、十一月二日福井を出発同八日京都に到着した。この間、徳川慶喜は大政を奉還し、情勢は大きく転換しつつあった。京到着の翌日、議定職に任ぜられた春嶽は、国事に奔走するとともに、徳川宗家の存続を願って憂慮一方ならぬものがあつた。これは、その間慶応三年十一月二日から翌四年二月廿日に至る詳細な日記である。)

一、御手録

一冊

松平春嶽 紙本墨書

(慶応四年正月二十二日より二月二十七日に至る覚書。)

一、省中掌記 第一号

松平春嶽 紙本鉛筆書(一部墨書)

(洋手帳に記録された覚書で、慶応三年十二月二日より 翌四年四月廿日まで記録されている。)

一、省中掌記 第二号

一冊

松平春嶽 紙本墨書

(前提第一号に続くもので、慶応四年四月二十一日より五月三日に至る記録である。)

一、日記・その他

四枚

松平春嶽 紙本墨書

一、議定御用日記

一冊

(それぞれ日記及び覚書の残簡で、(1)明治二年八月十一日 (2)同年八月十二日 (3)年不明閏四月八日 (4)明治八年六月一日より同月廿二日〔ペン書〕の四枚である。)

松平春嶽

紙本墨書

(慶応三年十二月九日王政復古の大号令が下り、総裁議定参与がおかれるや、松平春嶽も議定職に任ぜられた。この日記は、議定在任中、明治元年閏四月二十一日より同月二十六日までの用務日誌である。洋手帖。)

一、台省記 第二号

一冊

松平春嶽

紙本墨書

(前提「議定御用日記」と同様、明治元年五月三日より十日に至る用務日誌で洋手帳に記録されている。)

一、台記・同草稿

二冊

松平春嶽

紙本墨書

(「台記草稿」と表題のある一冊は、明治元年五月十二日より同月二十日まで、「台記第四号」と表題のある一冊は、同年五月二十一日より同月二十五日までの用務日誌である。)

一、鸞台日記(日紙)

六冊

松平春嶽

紙本墨書

(「鸞台日記」と表題のある一冊は、明治元年六月五日より六月十四日まで、「鸞台日記」と表題のある五冊は、同年八月十日より十二月二十九日までの用務日誌である。)

一、鸞台日記(新紙) 残簡

十一枚

松平春嶽

紙本墨書

一、日記・その他

(前提「鷺台日記」の未綴残簡で、明治元年五月二十九日より六月二十九日まで、及び同年八月十日より八月十四日までの用務日誌である。但し、残簡であるためその間に記載の欠けている日もある。)

二冊

松平春嶽 紙本鉛筆書

(いずれも洋手帖。一つは、明治十年正月十七日より二月二十三日に至る日記で横長の手帖。一つは、明治五年正月の宮中諸儀式の記録並びに同年五月廿三日の伊勢及び関西への行幸の様子が記録されている。)

一、台省日紙

五冊

松平春嶽 紙本墨書

(明治二年正月元旦より同月二十四日までの用務日誌。)

一、台省日紙残簡

二枚

松平春嶽

(前提「台省日紙」の残簡。)

一、東京城日誌

一冊

松平春嶽 紙本鉛筆書(一部ペン書)

(洋手帳で内容は三部にわかれ、第一は「東京城日誌」と題し明治二年四月二十一日より五月二日まで、第二は「明治四年辛未十二月二十七日よりの備忘録」と題し十二月二十七日より翌五年正月六日までの用務日誌であり、第三は英語学習のための単語帳となっている。)

一、滞西日録

一冊

松平春嶽

紙本墨書

一、北行略日記（越行日記）

七枚

松平春嶽 紙本ペン書（洋紙）

（第一号より第七号まで七枚からなる日記残簡である。松平春嶽は明治六年六月二十日東京を出発、墓参のため福井へ赴き八月六日東京に帰着したが、これはその間、六月十八日より七月二十六日に至る日記である。）

一、漫録（慶応四年戊辰秘記三）

某氏写 紙本墨書

（慶応四年中、松平春嶽が関係した事件について、近臣がその経過を簡略に記録したものである。第三となっているが他は現存しない。）

一、真崎御邸行幸之記

一冊

松平家家務局 紙本墨書

（明治六年十二月十九日、明治天皇が松平春嶽の真崎邸へ行幸された際の記録。）

一、臨御手続書

三件

松平家家務局 紙本墨書

（前提行幸之記同様、明治六年十二月十九日の明治天皇行幸関係記録。）

一、行幸関係書類

二件

松平春嶽・徳大寺実則 紙本墨書

（明治六年十二月十九日付けの宮内卿徳大寺実則の御達書と松平春嶽の覚書。）

一、台省備忘記草奔

二冊

松平春嶽 紙本鉛筆書

(洋手帖二冊に記録された用務日誌。明治二年正月十五日から、三月二日まで記録されている。)

一、要用書類留 第二

一冊

松平春嶽 紙本墨書

(慶応四年正月二十七日より三月十二日に至る用務書類記録簿である。)

一、無名洋手帖

二冊

松平春嶽 紙本鉛筆書

(一つは明治二年正月・二月、一つは明治五年五月・九月・十月の備忘録である。)

一、東京新聞九号

一冊

松平春嶽 紙本ペン書

(明治二年十月中の太政官布告・布達・布令などをはじめ、主要事件を書留めたもの。)

九号以外は現存しない。(洋手帖。)

一、近況新報写

一枚

松平春嶽写 紙本ペン書(洋紙)

(近況新報 明治六年十二月第一号、明治七年一月第二号の写。)

一、英仏蘭公使参内関係書類 八枚

松平春嶽 紙本墨書

(明治元年三月、外国公使参内の際の関係記録。巻紙に書かれたもので、四通は春嶽自筆、他の筆者は不明である。)

一、大久保卿帰朝二付御陪食宴記事 一綴

松平春嶽 紙本墨書

(大久保利通が明治六年五月二十六日に帰朝したのを記念して開かれた御陪食の宴記録。)

一、松栄君年譜

一冊

松平春嶽 紙本墨書

内題「大母松栄君年譜」 奥書「安政四年丁巳夏閏五月孝孫正四位下行左近衛権中将兼越前守源朝臣慶永泣血頓首百拜哀叙（花押）」

（松栄君は將軍家齊女、福井十四代藩主松平齊承室浅姫。）

一、近況新聞

一冊

松平春嶽 紙本墨書

（近況新聞と題して、明治六年十月より十二月中の主要事件を記録したもの。）

一、魚鴈録

三冊

松平家 紙本墨書

（明治二年十月十五日より明治三年三月十五日にいたる松平春嶽の往復書簡を筆写集成したものである。一部春嶽の自筆の箇所もあるが、多くは家令の手になる。第三冊の巻尾に共七冊とあるが他は現存しない。）

一、島津久光公祭典記

一冊

松平家 紙本墨書

（明治廿一年三月十三日、芝公園内紅葉館に於て執行された島津久光百日祭の記録である。松平春嶽が発起人の中心となり諸準備にあたった。）

一、春嶽公伝編年史料

九綴

春嶽公記念文庫編 紙本墨書

①文政十一年より天保十年の部 六綴 ②天保十一年の部 一綴 ③天保十二年の部 一綴 ④未整理稿 一綴 の九綴が残されている。松平家譜・襲封前録・棟華年表・文恭院殿御実紀等、出典を明記して編年体に整理した史料集である。春嶽公記念文庫の事業

一、松平家家譜

十三綴

として編纂に着手したものである。

松平家 紙本墨書

(巻百七十五 慶永公一より、巻百八十七 慶永公十三まで十三綴。天保九戊戌二月より弘化四年十二月二十八日までの編年記録で、十六代藩主松平春嶽の少・青年時代の家譜である。)

橋本左内関係

一、景岳先生謹慎中吟草

一冊

橋本左内 紙本墨書

表紙右肩書入(橋本左内自筆)「安政己未孟春浣創筆」

(表紙題箋は後補。謹慎中に詠じた漢詩を録したもの。橋本景岳全集所収。)

一、館務私記

一綴

橋本左内 紙本墨書

(橋本左内は、安政三年七月十七日福井藩校明道館講究師同様心得・蘭字掛に任ぜられて、九月二十四日には明道館幹事兼側役支配、更に翌四年正月十五日には明道館学監同様心得に登用されて藩内教育に活躍、八月二十日に至り上府して侍読兼内用掛を命ぜられた。これはその間、安政四年正月十六日より六月十二日に至る明道館勤務の日誌である。橋本景岳全集所収。)

一、明道館役輩並生徒名簿

一綴

筆者不明(村田氏寿か)

紙本墨書

一、明道館諸役輩名簿

（安政四年末頃の明道館職員及び生徒の名簿である。安政四年十月六日付の村田氏寿宛の橋本左内の書簡に「追々明道館役輩並生徒之員数之相違可_レ有_レ之候間、次便板帳之写一冊御廻し可_レ被_レ成候」とあつて、同年十一月二十二日付の村田氏寿の返書に「別紙館中役配並生徒階級名元書御廻申上候」と見えているのが、この名簿に相当するものと思われる。橋本景岳全集所収）

一綴

橋本左内 紙本墨書

一、明道館幹事公信録

（橋本左内自筆。左内自身は学監の頃に「幹事局御用取扱御調御用掛り并洋学所掛り橋本左内」とあつて、執筆の大体の時期が知られる。）

七枚

橋本左内 紙本墨書

（安政四年七月より十一月にいたる明道館の発令である。いずれも、左内が学監を村田氏寿に譲つて上府した後のものである。橋本左内全集には「明道館の発令一括」として収められている。）

一冊

橋本左内 紙本墨書

一、江戸遊学中の日記

内題「丙辰式月日録」

（安政三年二月二十七日から五月二十九日に至る日記。この間左内は江戸にあつて、漢・蘭学の研究に熱心であつたこと、諸藩の名士と交り天下の形勢を観取するに努めたことなどが窺われる。橋本景岳全集所収）

一冊

橋本左内 紙本墨書

一、適意偶抄

一、鈴韜雜録

奥書「右抄詩醇 安政己未三月朔華」「右詩醇涉写一過三月望 此日雨霽風日清明可人」
(安政六年幽居中、唐宋詩醇中の蘇東坡を読み、意に適せるものを、抜抄したもの。橋本景岳全集所収。)

一冊

橋本左内

紙本墨書

奥書「各借島子藏本涉獵一過三月念四 藜園」

(奥書中の島子は、福井藩儒矢島立軒のこと。安政六年三月の雜録で、前半は兵事に関する書籍の抜萃、その外は読書雜記である。橋本景岳全集所収。)

一、景岳割記甲集

子集日涉

一冊

橋本左内

紙本墨書

表紙右肩上書「安政二丙辰四月創筆」 (安政二丙辰は、安政三丙辰の誤りであろう。)

「論文」「雜説」など自己の論説や、諸書の抜萃が主となっている。橋本景岳全集所収。

一、景岳割記乙集

一冊

橋本左内

紙本墨書

表紙右肩上書「安政二丙辰五月創筆」 (安政二丙辰は、安政三丙辰の誤りであろう。)

前提甲集と同様の内容である。橋本景岳全集所収。

一、景岳割記丙集

史学日涉

一冊

橋本左内

紙本墨書

(前提甲・乙集と同時期のものと考えられる。和漢の史書の抜抄である。橋本景岳全集所収。)

一、写 懷

一冊

橋本左内

紙本墨書

一、吟稿

一冊
（安政五、六年頃、幽囚中の漢籍の抄録である。橋本景岳全集所収。）

橋本左内 紙本墨書

（安政五年十月以降、幽囚の身となって以後の吟詠を月日の順に記録したもの。橋本景岳全集所収。）

一、容安吟草

一冊

橋本左内 矢島立軒写 紙本墨書

（前提「吟稿」を、矢島立軒が浄書したもの。立軒の序文の終りに「安政四龍集己未仲春某日矢島暉撰干東武靈邸之曹舎」とある。容安は橋本左内の別号。橋本景岳全集所収。）

一、景岳先生手帳

一冊

橋本左内 紙本墨書

（横綴の手帳。題箋は後人の付加である。第一頁に蘭文で「Versameling vanonder-scheidene Dingen」とあって、「諸事彙纂」の意味である。橋本景岳全集所収。）

一、無題

一冊

橋本左内 紙本墨書

（漢詩集の抜抄用として用いたものと思われるが、内部は三丁程しか記入がない。）

一、読書筆記

一冊

橋本左内 紙本墨書

（題名は後人がつけたもので、本来は無題である。年代は不詳であるが、和漢籍の読後感を書留めたもの。橋本景岳全集所収。）

一、名詩抄

一冊

橋本左内 紙本墨書

(題名は後人の付加で、本来は無題である。漢詩集の内から心に残ったものを抄録したもので、幽居中の筆写と考えられる。)

中根雪江関係

一、松陰日記

一冊

中根雪江 紙本墨書

(明治六年九月一日より翌七年三月六日に至る日記。)

一、中根雪江履歴

一枚

中根雪江 紙本墨書

(尾崎庚の筆になる、明治三年四月までの履歴。)

一、松陰駁載

一冊

中根雪江 紙本墨書

(明治五年正月元旦より明治十年一月二十二日にいたる日録風の要用書留書。明治四年十一月、横浜刊行のジャパンヘラルド新聞抄訳を始め、当時の新聞記事の抜書等も含まれている。)

一、無題

一冊

中根雪江 紙本墨書

(文友との往復書簡、自己の随筆、詩、文章などを記録したもの。)

グリフィス博士関係

一、グリフィス博士出版図書広告並経歴書 五葉

紙本印刷

(出版図書広告 The Mikado's Empire 外二葉。経歴書 一葉。いずれも英文)

一、グリフィス博士著述論文並タイプ原稿 十綴

グリフィス

紙本印刷

- ① Woman's Progress in Japan
- ② Taro Kusakabe, the First Japanese Member of the Phi Beta Kappa
- ③ Christ the Creator of the New Japan
- ④ The Japanese Student at Eagles Mere
- ⑤ The Rutgers Graduates in Japan
- ⑥ Class of 1869 Rutgers College
- ⑦ In at the Death of Feudalism (タイフ)
- ⑧ An Account of my First meeting with Echizen Shungaku in Tokyo and of Fukui and Going There (タイフ)
- ⑨ Transformed Japan (タイフ)
- ⑩ Echizen Shungaku

日下部太郎関係

一、学校新聞残簡

四葉

活版局

紙本印刷

1、「The Far East」誌切抜

一葉

紙本印刷

(発行年月日不詳。米国における日下部太郎の勉学の有様、葬儀の様子などを記載している。)

(Grave of a Japanese Student in America と題して、日下部太郎関係記事、同墓
碑写真が記載されている。)

幕末諸士関係

一、両少伝日記

二卷

鈴木主税・平本良載

紙本墨書

箱裏書「いにしへの人の面影しのふにハ 此文巻にしくものハなし 万延の元年菊月六日」

(第一卷、巻頭に「御着城日より日記」とあって、途中欠けた部分もあるが五月十二日より廿三日及び七月一日より三日(年不詳)の要務日誌であり、鈴木主税の筆録になる。第二卷は、嘉永元年十一月二十三日より四月二日に至る要務日誌で、平本良載の筆録である。箱書は、松平春嶽。)

一、酒井十之丞日記

三冊

酒井十之丞

紙本墨書

(酒井十之丞は、福井藩士八百石、万延元年側用人となり、のち中老に進む。幕末国事に奔走し、王政復古に際しては参与職に任ぜられ国政に参画した。明治二十八年二月歿。)

①「中仙道御道中日記」文久二年五月、藩主の帰国に供奉した際の日記。

② 「心志録日記」七月（文久二年か）中の日記。

③ 無題 慶応二年五・六月の日記

一、福井藩政頃鉄砲沿革の概略 一綴

鈴木準道 紙本墨書

奥書「右沿革概略取調記載ス 大正八年一月鈴木準道」

（藩政期の、福井における鉄砲製造の歴史を記述したもの。）

一、長綱先生履歴并墓表

一綴

紙本墨書

（筆者不詳。長綱先生は、橋本左内実父。橋本家より春嶽公記念文庫に寄贈されたもの。）

一、福井済世館記事

一綴

紙本墨書

（筆者不詳。文化元年より明治二十四年に至る福井医学学校済世館の年譜である。橋本家より春嶽公記念文庫に寄贈されたもの。）

一、征長出陣記

三綴

松平家 紙本墨書

（二次にわたる長州征伐の記録を松平家家譜・征長一件記・武田日記・有賀日記など、松平家関係の史料をもとに編修したもので、福井藩を中心として記述してある。明治二十五年六月起稿、同年十一月末脱稿しているが、その後朱筆で数次の修正をへている。）

一、会津征討出兵記・同付録 四綴

松平家 紙本墨書

（中根雪江編纂の戊辰日記・武田三十郎の武田日記・村田氏寿の村田日記・松平春嶽の北越事件・粕谷沙庭の粕谷記録など、松平家関係の史料をもとに編修した、福井藩中心

一、続再夢紀事稿本

二十二綴

の記録。付録二綴は「賞罰之部」「雑之部」にわかれ、関係書翰、文書集である。

村田氏寿

紙本墨書

(大正十年、松平家が版をおこし日本史籍協会が発行した「続再夢紀事」の稿本である。本書は、中根雪江の編修した「昨夢紀事」「再夢紀事」のあとをついで、福井十七代藩主松平茂昭の命をうけた村田氏寿が執筆したもので、一々その出典を明記しながら文久二年八月二十七日より慶応三年十月にいたる事件を詳述している。勅使の関東下降、文久三年の改変、春嶽の政事総裁職としての活動、長州問題、將軍継嗣問題等にふれ維新研究の重要史料である。)

一、征長日記録

二綴

福井藩士

仙石某 紙本墨書

①「征長日記録」元治元年十一月三日より慶応元年正月四日まで

②「長防御征伐ニ付海路下之□、夫より山口江攻寄候九州筋諸藩出張人数并達書留」
元治元年十月廿六日より十二月七日まで

一、御當家御系図

一枚

某氏写 紙本墨書

(松平清康より元禄年間までの徳川・松平一族の略系図。)

二、古文書

二、古文書

一、越前大野鍛冶座関係文書案 二通 一卷

紙本墨書

「當町鍛衆之儀 他所江越候ハぬ様ニ其々涯分馳走有へく候 其段最前より五郎八被
申候間 先從我等如_レ此候 かしく

九月廿八日

遠藤六郎左衛門 盛牧 (判)

土藏かち惣左衛門との

「當郡鍛座之事 惣中へ不_レ及案内」新儀ニ入候事并かま鍛釘等何も諸道具ふり売人之
停止上ハ惣鍛中可_レ為進退也 仍状如_レ件 金森五郎八 (判)

天正三 十二月二十六日

大野郡 惣鍛衆中

土藏宗左衛門

(金森長近の商工業保護策を示す古文書として名高い。)

一、松平定信書翰付松平春嶽添書 一卷

紙本墨書

(年不詳 五月十五日付 大塚大助宛。大塚大助は田安家臣、幼少の定信の教育掛として
信任が厚かった。明治二十一年六月五日付の松平春嶽の由緒書が添付されており「比御書
翰は大塚家ニ所有之處、大塚家殆零落するを以テ田安之旧臣飯野院明譲り受保存せり、
慶永実父之事を認候もの故、讓受永世保存し子孫ニ伝えるもの也」と記されている。)

一、松平忠直宛行状

二通

紙本墨書

「宛行知行分之事

一高百石ハ

府中領ハ 大屋村内

一高五拾石ハ

大野領ハ 新庄村内

合百五拾石

右知行所全可令領知者也 仍如件 慶長十五年戊卯月十六日（黒印）

中根孫右衛門殿

「宛行知行分之事

高合五十石者 府中領当田村内

右為「加増」令「扶助」訖 全可領知者也 仍如件 元和八年戊極月二十三日（黒印）

中根孫右衛門との

（中根家旧蔵文書）

一、松平宗昌（昌平）折紙状 一通

紙本墨書

「年頭之御礼首尾好申上大悦之事候 扱又為「嘉儀」太刀馬代給之 幾久祝入候 謹言

正月三日 中務昌平（花押）

中根勅負殿

（松平昌平は福井九代藩主宗昌。）

一、田安齊匡書翰付松平春嶽添書 一幅

紙本墨書

松平春嶽添書「我実父田安從一位權大納言齊匡公之御直書也 天保九年戊戌十一月二十

三日田安第より常盤橋邸へ引移たり 其節御礼之書ヲ呈候御返翰也 側向頭取前波忠□な

一、田安齊匡書翰

二十六通

紙本墨書

る者此御書ヲ頂戴いたし度旨 頻ニ願候故送与候而前波家ニて珍藏いたし候 本年前波氏より此書翰を返呈いたし度旨申出候ニよつて領収せり 此故を記す

明治十九年十二月 正二位松平慶永（花押）

一、越前国主系譜並中根家系譜 一卷

中根衆逢 紙本墨書

（天保十四年より弘化三年にかけての松平春嶽宛書翰。一通く上包をし春嶽自筆の説明書がある。）

一、諸文書花押印章影写本 七十九葉

春嶽公記念文庫 紙本墨書

（前半は天平宝字年中より宝永年にいたる越前国主を列記し、後半には中根家の系譜が記載されている。宝永年間、当時の中根家当主衆逢〔享保十五年庚戌二月十七日卒〕が筆録したものである。）

（大正八・九年頃 春嶽公記念文庫が影写史料収集事業の一つとして、越前各地の古社寺旧家の古文書を調査した際、その署名・花押・印章のみを影写したもの。）

一、稲葉家文書

一括

（稲葉家は福井藩高知席十七家の一家で藩老格の重臣である。これは、この稲葉家旧蔵の文書類であるが、私的な往復書簡等が多く公式文書は少ない。代々藩政の枢機に参与した家柄であるだけに藩政史研究上の重要書類が少なくない。）

一、明石家文書

四十九点

①福井十一代藩主松平重昌印判状 明石縫殿宛一通

- ② 福井十二代藩主松平重富印判状 明石縫殿宛 三通
- ③ 福井十五代藩主松平斉善印判状 明石縫殿宛 四通
- ④ 福井十六代藩主松平慶永印判状 明石縫殿宛 五通
- ⑤ 福井十七代藩主松平茂昭印判状 明石將監宛 二通
- ⑥ 明石家歴代拝領宛行(含、加増)状 十二通
- ⑦ 明石甚左衛門豊弘兵法免許状 奈良勝之助宛 弘化三年二月吉日 一通
- ⑧ 越藩地理図説 一綴
- ⑨ 明石縫殿様御知行之内岩倉村高付家数人馬御改帳 明和元年十一月
- ⑩ 午年岩倉村御給知渡百姓高付人馬改帳 享保十一年五月
- ⑪ 明石縫殿様御知行之内徳尾村高付人馬御改帳 明和元年九月
- ⑫ 明石將監様御加増知之内徳光村高付人馬御改帳 延享三年六月二十一日
- ⑬ 午年水越村内御給知渡百姓高付人馬御改帳 享保十一年五月
- ⑭ 明石將監様御知行之内太田村高付家付御改帳 元文五年
- ⑮ 明石縫殿様御知行之内葛谷村高付家数人馬御改帳 明和元年九月
- ⑯ 明石縫殿様御知行之内栃泉村高付家付人馬御改帳 明和元年九月
- ⑰ 明石將監様御知行之内銚ヶ崎村高付家数人馬御改帳 元文五年十月
- ⑱ 明石縫殿様御知行之内天地村内百姓御改帳 明和元年十一月
- ⑲ 午年明石宮内給知銚ヶ崎村内百姓家数人馬改帳 享保十一年午五月二十八日
- ⑳ 明石縫殿様御知行之内松成村高付家付人馬御改帳 明和元年九月
- ㉑ 午年坂下村御給知渡り百姓高付人馬御改帳 享保十一年六月
- ㉒ 明石縫殿様御知行所三本木村高付家付人馬御改帳 明和元年十一月
- ㉓ 明石縫殿様御知行之内燈明寺村高付家付人馬御改帳 明和元年九月

松平春嶽関係

一、松平春嶽書翰

一通

- ②4 明石将監様御知行之内大土呂村高付家数御改帳 元文五年
- ②5 午年明石家宮内給知大土呂村内百姓家数人馬御改帳 享保十一年五月
- ②6 明石将監様御加増知之内大土呂村高付家付人馬改帳 延享三年六月二十一日
- ②7 明石縫殿様御知行之内徳光村高付家付人馬御改帳 明和元年十月
- ②8 明石縫殿様御知行之内水越村高付家付人馬御改帳 明和元年十一月

一、松平春嶽書翰

一卷

〔福井藩知事松平茂昭宛。明治二年九月二十六日付。この日從二位から正二位に昇進した松平春嶽がその事を福井藩知事茂昭に報知した書翰。〕

〔酒井十之丞宛。元治元年九月二十一日付。十之丞の実弟酒井采女が、家老奉職中死去したのに対する悔状。〕

一、松平春嶽書翰

一卷

〔祭文之儀文公家礼は朱子一家之私礼之様ニ被_レ考候 諸侯にして諸侯を祭る祭文之例定て可有_レ之と被_レ考候間 早々御吟味之上被_レ仰聞ニ致度候 譬へバ 大廣間之諸侯御三家を祭る祭文之例 大廣之間諸侯同等之諸侯を祭る祭文之例 先大方如_レ此ニテ此上例を漢土ニ比較して吟味有_レ之度候 但公辺より被_レ仰付ニテは無_レ之候 全下拙一已之尋問ニて候也

八月十日

松平春嶽

林大学頭殿

林図書頭殿

一、松平春嶽書翰

一卷

(御内御用御書覚。文久三年八月八日付。)

一、松平春嶽書翰

一卷

(文久三年。草案。「昨秋叡慮之趣云々」)

一、松平春嶽書翰残片

二紙

(橋本左内宛。安政五年一月十四日付。二片にわかれ途中散佚した箇所もある。昨夢紀事卷八、安政五年一月十四日の條に「一、同夕橋本左内を川路左衛門尉殿へ被_レ遣(中略)外に左内より相願ひ彼へ入説之一策ニ可_二相成_一様左内へ被_二成下_一候御書下ヶ如_レ左

左衛門尉儀は深く国家之御為ハ存居筈候得共、彼人縝密圓熟にて厳しく形迹を避候気味有_レ之候ハ、彼之実心には無_レ之候間、痛く弁折致し彼之実心秘蘊推而詰問可_レ申候也此義只今心付候故書下遣_レ之」とあるのが、この残簡に相当するものである。)

一、勅書(松平春嶽宛)

五通

紙本墨書

①「推任参議正四位上」元治元年四月十一日付

②「任民部卿」明治二年七月八日付

③「任大学别當」明治二年八月二十四日付

④「兼任侍読」明治二年八月二十四日付

⑤包紙上書「文久二年壬戌六月十日、以勅使大原左衛門督、大樹公江被_レ仰進候勅書御写」本文「一橋刑部卿ヲ後見トシ、越前前中将ヲ大老トシテ、幕府ヲ扶ヶ政事ヲ計ラシメハ戎虜ノ慢ヲ受スシテ衆人ノ望ニ協フヘクト、思召候事」

一、位記(松平春嶽宛)

三通

紙本墨書

① 「可正四位上」 元治元年四月十一日付

② 「叙 正二位」 明治二年九月二十六日付

③ 「叙 従一位」 明治二十一年九月七日付

一、口宣案（松平春嶽宛）

四通

紙本墨書

① 「任大藏大輔」 原本並案文 元治元年二月二十七日付

② 「叙正四位上」 元治元年四月十一日付

③ 「任 参議」 元治元年四月十一日付

一、御礼物所納状

一通

紙本墨書

（正四位上参議に昇進した松平春嶽の御礼物に対する宮中よりの納受書。元治元年四月。）

一、總裁朱印状

一通

有栖川宮熾仁親王 紙本墨書

「任議定職内国事務局輔」 松平春嶽宛 慶応四年二月

一、太政官通達

一通

紙本墨書

（松平春嶽を正二位に進位する旨の通達。 明治二年九月。）

一、太政官感状

一通

紙本墨書

（西南の役に際し、松平春嶽が 卵果実を寄付した事に対する感状。 明治十六年三月

五日付。）

一、宮内省通達

一通

紙本墨書

一、宮内書記官書翰

一通

紙本墨書

(松平春嶽を特旨により進位する旨の通達。 明治二十一年九月七日付。)

一、東京地学協会證状(松平春嶽宛)

三通

(献上物に対する礼状。 明治二十二年六月十七日付。)

紙本墨書

①社員承認書 明治十二年四月二十六日付。

②寄附証状 二通 明治十三年十二月二十八日付。

明治十七年五月三十一日付。

橋本左内関係

一、景岳橋本先生書翰帖

二帖

橋本左内・橋本綱常編

紙本墨書

(橋本左内の自筆書翰を二段に貼りこんだ折本で、左内の弟橋本綱常が明治二十一年に作成し、昭和十年に至り橋本家から「春嶽公記念文庫」に移管された。収載の書翰は左表の通りであり、左内自筆の外、若干他人の写しも含まれている。猶、上段の文書番号は「橋本景岳全集」に附されているものである。)

文書番号	年 月 日	差 出 人	受 取 人
二二三	嘉永五・二・二五	橋本左内	太田良策等
五〇	安政元・六・四	"	高畠市郎右衛門
五三	" 元・八・二五	"	弟 繩三郎(綱維)
一五〇	" 三頃	"	殖産貿易の意見書
一五一	" "	"	弊政改革の意見書
八七	" 二・三頃	"	西洋事情の概要
七四	" 三・四・九	"	中根雪江
七七	" 三・四・二六	"	"
八八	" 二頃	"	佐々木 権 六(詩稿)
八三	" 三・五・九	"	蘭書治鉄学の譯文
一一四	" 四・四・朔日	"	中根雪江
一一五	" 四・四・九	"	"
一五二	" 三・四頃	"	殖産意見草稿
一四二	" "	"	人材養成意見草稿
一五三	" "	"	農政改良意見草稿
一四三	" "	"	学制改革意見草稿
一四四	" 四・春	"	明道館中に算科局を設くべき意見

一六八	安政四・九・朔日	中根雪江
一七一	四・九・五頃	立花 壱 岐
	四	春嶽公を経て幕府へ呈した 答議案
二四二	四・一・二一	中根雪江
二二一	四・一〇・二四	石原甚十郎に托して田宮弥 太郎に贈った書簡案
二六四	四・二・九	堀 忠左衛門
二六九	四・二・二二	中根雪江
二七六	四・二・二九	田宮 弥太郎
二九〇	四・二・二八	中根雪江
二八九	四・二・二八	”
二九二	四・二・二八	春嶽よりの川路説得の使命 を拝辞する書
三一三	五・正月・四	川路左衛門尉に初対面応答 書
三三三	五・二・八	中根雪江
三四二	五・二・二二	川路 左衛門尉
三四八	五・二・中旬	三條 實 萬
三六五	五・二・二九	中根雪江

書翰帖

その二

文書番号	年 月 日	差 出 人	受 取 人
三九〇	安政五・三・一四	橋本左内	中根雪江(三通)
三六六	安政五・二・二九	"	中根雪江
三六七	" 五・二・二九	"	"
三六八	" 五・二・二九	"	"
三六九	" 五・二・二九	"	"
三七〇	" 五・二・二九	"	京都の形勢を報ずる江戸藩邸への密書
三七一	" 五・二・二九	"	"
三七二	" 五・二・二九	"	"
三七三	" 五・二・二九	"	"
三七四	" 五・二・二九	"	"
三七五	" 五・二・二九	"	"
三四九	" 五・二・二一	川路左衛門尉	
三八〇	" 五・三・七	中山忠能以下七卿建白書	
三九二	" 五・三・一四	橋本左内	中根雪江

三九〇	安政五・三・二四	橋本左内	村田氏寿
三九一	〃五・三・二四	〃	中根雪江(三通)
四一五	〃五・三・二二	〃	中根雪江
四二五	〃五・三・二四	〃	中根雪江 三月十五日以後 の日報書
四二六	〃五・三・二四	〃	中根雪江
四二七	〃五・三・二四 二五	橋本左内日報書	
四七〇	〃五・五・二	橋本左内	中根雪江
四七二	〃五・五・二	〃	近藤了介
四七四	〃五・五・二	米使ハリスと條約調印延期に関する約定の写	横山猶蔵
四八九	〃五・五・二四	橋本左内	本多修理・狛山城への回章
五〇五	〃五・五・二八	松平春嶽	尾張徳川慶勝(左内起稿)
五四二	〃五・六・二八	橋本左内	平山謙二郎
五五一	〃五・六・二四	〃	小南 五郎右衛門
	〃五・七	〃	近藤了介(断片)
五八八	〃五・七・二四	〃	〃
五九三	〃五・七・二〇	〃	横山猶蔵
六〇一	〃五・七	越前藩幕府に呈したる願書案	

一、橋本左内関連書翰帖

二帖

橋本左内

橋本綱常編

紙本墨書

五九五	安政五・七・二四	橋本左内	中根雪江
六〇八	〃 五・八・七	〃	〃
六三三	〃 五・九・二三	〃	服部熊五郎
六五八	〃 五・一二・二五	〃	中根雪江
六六〇	〃 六・正月・二三	〃	〃
六六一	〃 六・正月・二五	〃	〃
六六三	〃 六・三・二	〃	〃
六六四	〃 六・三・三〇	〃	〃
六四六	〃 五・一〇・二二	常磐橋藩邸に於て幕吏の審問に対する橋本左内の応答	
六三四	〃 五・春	在京橋本左内の手記に係る諸寺院心得方	
九〇	〃 三・七・二一	水戸侯直書達の写（左内の自筆）	
六七三	〃 六・一〇・六	橋本左内獄中よりの密書	
二		橋本左内少年時代の詩書及遺墨八点	

（前提）「景岳橋本先生書翰帖」と対をなすものであり、橋本綱常が明治二十一年に作成昭和十年に至り橋本家から「春嶽公記念文庫」に移管された。収載の書翰は左表の通りであり、橋本左内宛の諸士の書翰並びに関係諸人士の書翰が貼りこまれている。猶、上段の文書番号は「橋本景岳全集」に付されているものである。）

文書番号	年月日	差出人	受取人
三九九	安政五・三・一八	松平春嶽	川路左衛門尉
"	" 五・二・二四	"	三国大学
"	" 五・四・九	三条前内府公 松平春嶽	松平齐堂公
五七〇	" 五・七朔日	米国との条約調印後の諮問に対する大広間衆建 白写	田安公
三〇四	" 五・正月・六	薩摩藩島津斉彬近衛忠熙及三條實萬	
一二二	" 四・六・二五	中根雪江	橋本左内
一二三	" 四・六・二五	"	"
一二九	" 四・七・一〇	"	"
一三一	" 四・七・二三	"	"
一二二	" 四・一〇・二五	"	"
一二三	" 四・一・一〇	"	"
三〇三	" 五・正月・六	安島弥次郎	鶴飼吉左衛門
三三〇	" 五・正月・下旬	水戸烈公	鷹司太閤
三三二	" 五・正月・二五	中根雪江	橋本左内
三三九	" 五・二・一一	"	"
三八一	" 五・三・一〇	"	"

五九〇	五六四	五六三	五五九	五五五	五二九	五〇九	四七五	四七三	四六八	四六一	四四〇	四三九	四三〇	四〇二	四〇〇	四〇一	三八八	三八五	三八二
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	安政五・三
五・七・一五	五・六・晦日	五・六・二九	五・六・二七	五・六・二五	五・六・一三	五・五・晦日	五・五・三	五・五・二	五・五・朔日	五・四・二七	五・四・一一	五・四・一一	五・三・二六	五・三・一八	五・三・一八	五・三・一八	五・三・二四	五・三・二二	五・三・二二
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	中根雪江	傳議兩奏堀田閣老の旅宿へ持参の勅錠	"	"	"	中根雪江	朝廷御返答並びに八十六卿願出の写	中根雪江
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	橋本左内	橋本左内	"	"	橋本左内	安島帯刀に託して橋本左内	橋本左内	橋本左内

六〇四	安政五・八・二		橋	横
六〇九	" 五・八・八		本	山
六一〇	" 五・八・八		左	猶
六一一	" 五・八・八		内	蔵
六一六	" 五・八・二二			
六三〇	" 五・九・一三			
五七八	" 五・七・五	狛		
二〇三	" 四・一〇・一〇	本		
二三五	" 四・一・一一	多		
二四四	" 四・二・二六	修		
四八六	" 五・五・二三	理		
四九〇	" 五・五・二五			
四九一	" 五・五・二五			
四九四	" 五・五・二〇			
五三三	" 五・六・一五			
五六七	" 五・七・朔日			
五〇三	" 五・五・二八	本		
一三五	" 四・八・六	多		
一七九	" 四・九・九	飛		
三二四	" 五・正月・二六	彈		
		吉		
		田		
		東		
		窠		

書翰帖

その二

文書番号	年 月 日	差 出 人	受 取 人
三七六	安政五・正月・一九	外島直八	橋本左内
三三二	〃 五・二・三	水野筑後守	松平春嶽
四六三	〃 五・四・頃	〃	〃
四六五	〃 五・四以降	〃	〃
四七七	〃 五・五・四	〃	橋本左内
四五二	〃 五・四・二一	岩瀬肥後守	〃
四五六	〃 五・四・二六	〃	〃
四五九	〃 五・四・二七	〃	〃
四六〇	〃 五・四・二七	〃	〃
四七六	〃 五・五・三	〃	〃
四七九	〃 五・五・五	〃	〃

七二	安政三・二・一九	杉田成卿	市川齊宮
七三	〃 三・四・二	〃	橋本左内
五九	〃 二・七・二〇	〃	〃
一七二	杉田成卿 〃 四・九・六	天方五郎左衛門 手書(蘭文)	〃

一、橋本左内関連書翰巻軸

八巻

紙本墨書

(前提四帖の書翰帖と同じく、橋本家から昭和十年「春嶽公記念文庫」に移管されたも

五五四	五四一	四二三	四二二	五七二	五五三	五五二	五五〇	五四八	五四四	五四四	五一三	五〇四	五〇一	四八七	四八二	四八一
五・六・二・四	五・六・一・八	五・三・二・五	五・三・二・四	五・七・三	五・六・二・四	五・六・二・四	五・六・二・四	五・六・二・三	五・六・二・〇	五・六・五	五・六・三	五・五・二・八	五・五・二・四	五・五・二・四	五・五・九	安政五・五・八
〃	〃	平山謙二郎	黒岡直八郎	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	橋本左内	溝口辰五郎	近藤了介	橋本左内	松平春嶽	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

のである。八巻にわかれ、収載された書翰は左表の通りで、主として橋本左内宛の幕末諸士のものである。上段の文書番号は「橋本景岳全集」に付されているものである。）

巻軸 その一

文書番号	年 月 日	差 出 人	受 取 人
五七五	安政五・七・四	平本平学	橋本左内
五三五	〃五・六・六	萩原金兵衛	〃
一二八	〃四・七・一〇	平本平学	〃
六〇三	〃五・八・一	〃	〃
二一五	〃四・一〇・二三	〃	〃
二七九	〃四・二・二二	〃	〃
一二四	〃四・六・二五	桑山十兵衛	〃
二九三	〃四・二・二九	平本平学	〃
一二五	〃四・六・二五	桑山十兵衛	〃
六一七	〃五・八・二二	石原甚十郎	〃
六三一	〃五・九・二四	桑山十兵衛	〃
一〇六	〃四・正月三〇	長谷部甚平	〃
二九四	〃四・二・二九	萩原金兵衛	〃
一七七	〃四・九・九	長谷部甚平	〃
四六九	〃五・五・朔日	萩原金兵衛	〃

一六三	安政四・八・二五	石原 甚十郎	〃
二六二	〃 四・二・八	〃	〃
一九四	〃 四・九	京都所司代より傳奏兩卿への通達書	
三四〇	〃 五・二・二一	石原 甚十郎	橋本 左内
一八八	〃 四・九・二六	長谷部 甚平	〃
五九四	〃 五・七・二二	石原 甚十郎	〃
二〇一	〃 四・一〇・一〇	長谷部 甚平	〃
二六七	〃 四・二・二二	〃	〃
二九九	〃 五・正月・三	〃	〃
三二六	〃 五・正月・二七	〃	〃
三二六	〃 五・正月・二七	橋本左内書二首	〃
四四八	〃 五・四・二二	長谷部 甚平	〃
二二五	〃 四・一〇・二六	〃	〃
四五七	〃 五・四・二六	〃	〃
四六六	〃 五・四	越藩築港届書	〃
	〃 五・四	安藤フクラ大概之図	〃
五六一	〃 五・六・二九	長谷部 甚平	〃
五九七	〃 五・七・二七	〃	〃
一五八	〃 四・八・二四	〃	〃
五九二	〃 五・七・二八	〃	〃

卷軸

その二

一二七	安政四・七・九	村田氏寿	橋本左内
一三二	“ 四・八・朔日	“	“
一三六	“ 四・八・九	“	“
六二四	安政五・八・二九	“	“
六三五	“ 五・九・二七	“	“
六四五	“ 五・一〇・一九	“	“
六五四	“ 五・一一・一二	“	“
六二六	“ 五・九・九	村田氏寿及長谷部甚平	“
四七八	“ 五・五・四	高田 孫左衛門	“
五三〇	“ 五・六・一三	“	“
六一五	“ 五・八・二三	“	“
一八七	“ 四・九・二六	市村 乙介	“
六二〇	“ 五・八・二六	高田 孫左衛門	“
六二八	“ 五・九・二二	“	“
六六八	“ 六・七・一〇	市村 乙介	“
六二九	“ 五・九・一三	高田 孫左衛門	“
四五三	“ 五・四・二二	越藩城使篠原亮助	同藩真杉所左衛門

一五七	安政四・八・二三	〃	〃
一七五	〃四・九・九	〃	〃
一七六	〃四・九・九	〃	〃
一五六	〃四・八・二三	〃	〃
一九〇	〃四・九・二六	〃	〃
一八九	〃四・九・二六	〃	〃
二二四	〃四・一〇・二六	〃	〃
二〇二	〃四・一〇・二〇	〃	〃
二三六	〃四・一一・一一	〃	〃
二四六	〃四・一一・二二	〃	〃
三〇〇	〃五・正月・三	村田氏寿(添書あり)	〃
二六六	〃四・一二・一一	〃	〃
三〇二	〃五・正月・三	〃	橋 横
二八五	〃四・一二・二六	〃	本 山
三二七	〃五・正月・二七	〃	左 猶
三二八	〃五・正月・二七	〃	内 蔵
三二九	〃五・正月・二四	〃	〃
三三六	〃五・二・九	〃	〃
三五二	〃五・二・二四	〃	〃
四一六	〃五・三・二二	〃(追書あり)	〃

巻軸

その三

三五六	安政五・二・二七	幕府大奥御台所附の老女生嶋より薩邸への密書(其の一)
三五三	安政五・二・二四	横山猶藏
五六二	五・六・二九	橋本左内
四四九	五・四・二二	〃
五九六	五・七・二六	〃
五九一	五・七・二六	〃
六一二	五・八・二四	〃
六二五	五・八	〃
六二一	五・八・二七	御教書及有志投書の写
六一四	五・八・二六	村田氏寿
六二七	五・九・九	〃
六〇七	五・八・初旬	〃
六四〇	五・〇・九	〃
六三六	五・九頃	〃
六四四	五・〇・一九	〃
六五三	五・一・一二	〃
六五七	五・二・七	〃

三三七	安政五・二・二八	幕府大奥御台所附の老女生嶋より薩邸への密書(其の二)
一六二	" 五・八・二五	橋本左内
二二八	" 四・一・四	西郷吉兵衛に託し橋本左内
二四一	" 四・一・二三	橋本左内
二四〇	" 四・一・二三	"
三一七	" 五・正月・二二	"
四三七	" 五・四・三	"
二三〇	" 四・一・八	"
二三九	" 四・一・一一	"
五三六	" 五・六・六	"
六〇二	" 五・八・一	"
九七	" 三・八	"
六七	" 三・二・朔日	岡田準介・野村洵蔵・坂部簡助
七一	" 三・二・二五	吉田東篁
五三四	" 五・六・六	橋本左内
五八二	" 五・七・六	横山猶蔵
五三二	" 五・六・五	橋本左内
五〇七	" 五・五・二九	"
五七三	" 五・七・三	"
六三二	" 五・九・一八	"

五六九	五四五	四五五	五六〇	五一六	五二三	二五五	二四八	四九九	二八三	五八三	六〇六	五八六	五五八	五八五	五七四	五五八	五五七	五四六
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	安政五
五・七・朔日	五・六・二〇	五・四・二五	五・六・二九	五・六・六	五・六・六一	四・二・二・六	四・一・一・三三	五・五・二二	四・二・二・二六	五・七・六	五・八・五	五・七・九	五・六・二七	五・七・八	五・七・四	五・六・二七	五・六・二六	六・二・二
勝 豊 作	小 曾 根 乾 堂	岡 田 某	”	”	小 曾 根 乾 堂	広 瀬 傳 八 郎	竹 沢 寛 三 郎	熊 谷 半 之 壺	田 原 直 助	有 村 俊 齊 (置 手 紙)	奈 良 原 喜 左 工 門	”	”	”	堀 忠 左 衛 門	”	”	”
”	”	”	”	”	”	”	橋 本 左 内	横 山 猶 藏	”	橋 本 左 内	”	横 山 猶 藏	橋 本 左 内	横 山 猶 藏	橋 本 左 内	”	”	”

二六三	安政四・二・二・八	横山猶藏	吉田東寧
二九一	四・二・二・二・八	〃	国元宿
四三三	五・三・三・二・九	〃	橋本左内
三八四	五・三・三・三	〃	〃
四七一	五・五・二	〃	〃
五八七	五・七・九頃	〃	〃
六〇〇	五・七・中頃	友人(断片)	〃
三六二	五・二・二・九	近藤了介	橋本左内
四一八	五・三・三・三	〃	〃
四四三	五・四・二・二	〃	〃
四八五	五・五・二・二	〃	村田氏寿並橋本左内
五四七	五・六・三・三	〃	橋本左内
五〇六	五・五・二・八	〃	村田氏寿並橋本左内
五七一	五・七・二	〃	橋本左内
五七の別紙	五・七・二	〃	〃
五八四	五・七・八	〃	〃
六一三	五・八・二・四	〃	〃
三三八	五・二・二・一	服部熊五郎	〃
三三七	五・二・二・〇	〃	横山猶藏

七六	二〇四	二四五	二一〇	三九七	五二四	五二八	五一九	五一八	〃	〃	四四六	四四五	三九六	四三八	四四七
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	安政五・四・二三
三・四・二二	四・一〇・二〇	四・一一・二二	四・一〇・二〇	五・三・二八	五・六・一一	五・六・二三	五・六・一〇	五・六・九	五・四・四	五・四・二二	五・四・二二	五・四・二二	五・三・一七	五・四・七	五・四・七
〃	今村 艸介	坂部 簡助	野村 洩藏	本多 飛弾	〃	〃	〃	服部 熊五郎	江戸 同所	佐原 恒藏	服部 熊五郎より橋本左内への別書	服部 熊五郎	(從御役所)	京都越前邸内役所	服部 熊五郎
〃	〃	橋本 左内	菊地 為三郎	一条大納言外四名	〃	〃	〃	橋本 左内	外番方	小林 伊三次	橋本 左内	橋本 左内	(呈西御小屋)	〃	橋本 左内

二二六	一七八	一八六	三〇一	四五八	五六六ノ二	六一九	〃	〃	五六六ノ五	五六六ノ四	五六六ノ三	五六六ノ二	〃	五六六ノ一	五三一	二三七
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	安政四・一・一
四・〇・二三	四・九・九	四・九・二五	五・正月・三	五・四・二六	五・七・一八	五・八・二六	五・八・二六	五・八・二六	五・八・二六	五・八・二四	五・七・二七	五・七・二八	五・六・二九	五・六・二九	五・六・二四	一・一・一
〃	〃	三岡石五郎	佐々木権六	末松久兵衛	〃別書	〃	〃別紙ノ二	〃別紙ノ一	榑原幸八	伊藤友四郎	〃	〃	同右別書	榑原幸八	伊藤友四郎	榑原幸八
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	橋本左内	横山猶蔵	橋本左内

巻軸

その六

二一八	安政四・一〇・二三	林	横山猶蔵
二一七	” 四・一〇・二三	半井仲庵	”
二四七	” 四・一・二三	三岡石五郎	”
二六八	” 四・二・二二	笠原良策	”
三〇六	” 五・正月・七	橋本左内	”
六〇五	” 五・八・二	横山猶蔵	”
一三三	” 四・八・五	横山猶蔵	”
一三四	” 四・八・六	横山猶蔵	”
二八〇	” 四・二・二三	横山猶蔵	”
五九八	” 五・七・二七	横山猶蔵	”
三〇七	安政五・正月・八	老中堀田備中守京都差遣辞令の写	
三三四		安政四年十二月 林大学頭一行・安政五年二月 堀田備中守一行、上京の際の止宿所覚	
三三五	” 五・正月・二〇	京都野村泐蔵よりの報告書及秘書写	
	” 五・三・二一	勅答に対する堀田備中守の御伺及同月二五日の勅答写	

四〇四	四〇六	四〇七	三九八	三九四	三九五	三八六	三七六	三五八	三八九	三五九	三八五	四一九	四〇八	三七九	三七八	四三〇	四三一
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	安政五・三・二五
五・三・一九	五・三・一八	五・三・一九	五・三・一八	五・三・一六	五・三・一七	五・三・一四	五・三・三	五・二・二八	五・三・一三	五・二・二八	五・三・一四	五・三・二四	五・三・二一	五・三・七	五・三・五	五・三・二六	五・三・二五
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	三 国 大 学	”	”	”	”	伊 丹 藏 人	傳 議 兩 奏 堀 田 閣 老 旅 宿 へ 持 參 の 勅 諭	西 城 一 件 に 付 傳 奏 よ り 堀 田 備 中 守 へ の 達
”	”	”	”	”	”	橋 本 左 内	”	中 根 雪 江	橋 本 左 内	近 藤 了 介	”	”	”	”	橋 本 左 内	”	”

四四一	四四一	四一〇	四二〇	三九三	四〇九	三五二	三八七	三六三	三五〇	三四七	三五五	三四六	四四四	四六二	四三六	四一七	四一二	四一四	四一一
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	安政五
五・四・一	五・四・三	五・三・二	五・三・二	五・三・二	五・二・二	五・二・三	五・三・四	五・二・二	五・二・二	五・二・二	五・二・二	五・二・二	五・四・二	五・四・二	五・三・三	五・三・三	五・三・三	五・三・三	五・三・二
森寺 若狭守	朝廷より 関東へ御沙汰書写 光成(慶橋大納言)	森寺 若狭守	"	"	"	"	"	"	"	"	"	森寺 因幡守	"	"	"	"	"	"	"
橋本 左内	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	橋本 左内	近藤 了介	橋本 左内	中根 雪江	橋本 左内	中根 雪江	"	"

巻軸

その七

二七〇	二五〇	二六五	一八五	二二〇	一七〇	一八三	四九二	一六九	四八八
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	安政五・五・一四
四・二・二三	四・一・二七	四・二・二〇	四・九・二四	四・〇・二四	四・九・四	四・九・一六	五・五・一五	四・九・朔日	溝口藏人
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	立花壱岐	〃	溝口藏人
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	橋本左内	〃	岩瀬肥後守

五六八	三四四	三六四	〃	四四一
〃	〃	〃	〃	安政五・四・一一
五・七・一	五・二・二二	五・二・二九	五・四・一一	森寺若狭守
森寺若狭守	森寺因幡守	塚本凶書	坊城家塚本凶書	勅令別紙
橋本左内	〃	服部熊五郎	橋本左内	橋本左内

巻軸

その八

九二					
三三四	安政五・二・二四	正月・二〇	民部少輔	松平春嶽	
三二四	五・正月・二八		富塚順作	橋本左内	
三四三	五・二・二二		高村俊蔵	橋本左内	
	?		?	?	
	?		?	?	
	一二・五		百拙	橋本左内	
	?		?	?	
	三・八・朔日		伊太郎	橋本左内	

二七二	安政四・二・二四	立花壱岐	横山猶蔵
二〇六	四・一〇・二〇	池辺藤左エ門	橋本左内
二〇五	四・一〇・二六	立花壱岐	
二三三	四・一・二〇		
二四三	四・一・二一		
二六〇	四・二・二七		
二八八	四・二・二八		
二三八	四・一・二一	池辺藤三郎	

四九八	四九六	五〇六	四九六	三二一	三〇五	三七八	二二一	二七三	二五一	二六一	二〇九	一八〇		一六七	一六四	
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	卯月・二	"	安政四・八・二六	
五・五・二二	五・五・二一	五・五・二五	五・五・二一	五・正月・二五	五・正月・七	四・二・二二	四・二・二一	四・二・二五	四・一・二八	四・二・八	四・二・〇・二九	四・九・二〇	六・二・四	四・八・二八	?	?
藤	森	"	"	"	"	"	"	"	"	"	平岡	平岡	?	?	平岡	?
"	恭助	"	"	"	"	"	"	"	"	"	岡田四郎	岡田四郎	"	"	岡田四郎	"
横	山	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	橋本	?	?	橋本	橋本
"	猶藏	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	左内	"	"	左内	左内

一、景岳祭々文巻軸

一卷

紙本墨書

五三七	安政五・六・二七	羽倉外記	横山猶藏
六一五	六・二〇	塩谷甲藏	橋本左内
五四三	五・六・二八	安井仲平	”

① 松平春嶽より故橋本左内における告文 明治十三年十月七日附

② 松平春嶽より故橋本左内建碑祭の弔詞 明治十八年十一月二十二日附

③ 松平春嶽筆 祭文 明治十五年十月七日附

④ 鈴木魯より故橋本左内における詩文 乙亥（明治八年か）十月六日附

以上四件を二段に貼りこんだもので、昭和十年橋本家より「春嶽公記念文庫」に移管された。

一、送橋本左内遊学之辞巻軸

一卷

紙本墨書

① 送橋本篤齋兄遊学干撰津 吉田惇書

② 送橋本弘道遊浪華序 吉田東篁書

③ 答綱紀橋本君机下 田代次修書

④ 寄贈橋本才子 柳軒山人惠書

一、橋本左内書翰

三通

紙本墨書

一、溝口郷右衛門宛書翰

一卷

橋本左内 紙本墨書

- ①石原甚十郎・瀧勘藏宛書翰。安政六年十月三日付。処刑四日前のもので「金子送付アリ度シ」との依頼状である。橋本景岳全集所収。
- ②瀧勘藏宛書翰。安政六年十月四日付。処刑三日前的のもので「金子落手セリ」との返信である。橋本景岳全集所収。
- ③村田氏寿宛正月八日付書翰の添書。

一、村田氏寿宛書翰

一卷

橋本左内 紙本墨書

（安政四年十一月二十八日付。藩命により、江戸詰めとなった左内が、在藩の村田氏寿宛に出した書翰で、内治外交を論じた卓見の書である。所謂「日露同盟論」を述べた著名な史料である。）

中根雪江関係

一、中根雪江宛書翰貼交六曲屏風 一綴

紙本墨書

（橋本左内・西郷隆盛・大久保一藏など、幕末維新の諸士の書翰を貼りこんである。）

晩年の雪江が屏風に仕立てたものである。

一、福井藩印並東京運上所印譜 二紙

押朱印紙片

(中根雪江旧蔵のもので、「福井藩印」「東京運上所」の二つの印鑑が押された紙片である。)

一、中根文書

二冊

春嶽公記念文庫 紙本墨書

(上・下二冊よりなり、春嶽公記念文庫の用箋が用いられている所から、同文庫の事業の一つとして採録されたものと思われる。)

内容は中根家の文書集というよりは、中根雪江一代の往復書翰集というべきもので、雪江旧蔵の書翰類を筆写したものである。)

W・E・Griffis 関係

一、グリフィス博士雇傭契約書原本並和訳本 二通

福井地方庁永田大属官

W・E・Griffis 紙本ペン書

(明治三年十二月六日付。和訳本は大正中期春嶽公記念文庫に於て作成したものである。)

一、松平慶民宛書翰

四通

W・E・Griffis 紙本ペン書

(英文。大正六年六月二十一日付、同七月二十六日付、同八月六日付、同十月八日付の四通であり、それぞれ封筒が付属している。)

一、グリフィス博士宛書翰

十一通

紙本墨書

- ① 松平春嶽 片仮名 明治六年五月十七日付
- ② 松平春嶽 片仮名 明治六年九月十三日付
- ③ 松平春嶽 片仮名 明治七年一月一日付
- ④ 松平春嶽 和文ペン書 明治四年三月十三日付
- ⑤ 松平茂昭 和文 明治四年六月三日付
- ⑥ 村田氏寿 和文 明治四年十二月八日付、十二月九日付、同五年六月三日付 三通
- ⑦ 中根 新 和文 明治四年六月八日付
- ⑧ 小笠原幹 和文 明治四年八月二十四日付
- ⑨ 差出人不詳 和文 明治四年三月福井着任直後か

幕末諸士関係

一、徳川家茂書翰

一幅

紙本墨書

「此程所勞如何ニ候哉承度候、兼て承知之通深心配之時節數日出仕無之甚不安心慮候、天下安危ニも拘り候間太儀ニは候得共少々も快氣候ハハ押て出勤有之候様偏待入申候猶和泉守より可申入候也 六月廿七日 家茂 松平春嶽殿」

(文久二年の書翰である。この書翰の下段には、明治十二年八月付の松平春嶽の由緒書が貼りこまれ、一幅に仕立てられている。)

一、徳川慶喜書翰

一卷

紙本墨書

「拝誦 先以御勇健奉_レ賀候、然は昨日は御心付之趣被_レ仰下 □々諱承乍_レ憚御尤千万御同意ニ御さ候、実は被_レ仰下 候通り当職ニては、御自身被_レ為_レ入 候て可_レ然義候得共、是は不_レ行事ニ候得は物載召出候様可_レ致奉_レ存候、御報如_レ斯御座候

正月十五日 剛 鼻公御館

(文久四年正月、滞京中の松平春嶽が意見具申をしたのに対する慶喜の返書である。

「剛」とは慶喜のこと、「鼻公」とは春嶽のことである。

一、徳川斉昭書翰

一卷

紙本墨書

(天保十四年、十六才の松平春嶽が福井への初入国にあたって、藩主としての心得を質問したのに対する水戸烈公の回答書である。天保十四年五月十八日付で、九ヶ條よりなり「九ヶ條御回答書」と呼ばれている。

箱裏書に「天保十四癸卯年七月御表装」とあって、春嶽がこれを一早く表装、座右の書としたことが知られる。

一、筆姫書翰

八通

紙本墨書

(松平春嶽宛。筆姫は田安斉匡女、松平春嶽実妹である。)

一、近衛忠愨並夫人書翰

一幅

紙本墨書

(松平春嶽宛の忠愨書翰二通、同夫人書翰二通の四通を一幅に表装してある。)

一、岩倉具視書翰

一幅

紙本墨書

一、山内容堂書翰

（慶応三年から四年にかけての松平春嶽宛書翰四通及び明治十七年七月付の春嶽筆由緒書が添付されている。）

一幅

紙本墨書

松平春嶽添書「親友容堂卿之返答之書翰也、書中猪口贈与之事ハ拙家之珍藏可致之處、後世ニ至り候てハ如何相成候哉と存候故、容堂卿之御子豊尹君へ贈之、外ニ被認候直筆之画は額ニいたし掲置候也 辱知 春嶽永」

（松平春嶽宛、安政五年七月五日の書翰である。）

一、朶雲群集

一帖

鈴木準道製作

紙本墨書

松平春嶽筆題辭「余駕鈍劣才之身を以、荷天恩 旧幕府惣裁職之重任を負担ス、辞職候の後東奔西走為 国家ニ一身ヲ抛ちて聊尽力、維新前後不顧不肖 周旋尽力す、仍之公卿侯伯往復數百回、其書状を家扶鈴木準道之懇請ニより割愛せり、此書状を觀る者は當時之景況を想像せよ、是を以題辭之代トス 明治十六年三月 正二位勲二等源朝臣 慶永書（印）」

（有栖川熾仁親王、山階晃親王、徳川斉昭、三條実美、岩倉具視、徳川慶喜、近衛忠愼 山内豊信、興正寺撰信、鷹司輔懋、徳川慶勝、鍋島直正、伊達宗城、長岡護美、松平容保、秋月種樹、細川護久、嶋津久光、久我建通、阿部正弘、中山忠能、蜂須賀茂韶、植松雅言、千種有文、万里小路博房、板倉松叟、浅野長勲の二十七名の松平春嶽宛書翰が折本仕立として収められている。）

一、六賢遺墨の幅

一幅

紙本墨書

一、三友遺墨

(木戸孝允、西郷隆盛、藤田東湖、小松帶刀、田宮如雲、小原仁兵衛の六人の書翰と、明治十二年一月付の松平春嶽筆添書の七通が一幅に仕立てられている。春嶽の添書によると、明治十年十月三日雪江が歿してのち、子息中根牛助から西郷隆盛を除く五人の書翰を贈られ、これに以前から所蔵していた隆盛の書翰を合わせて表装したものであることが知られる。)

一幅

紙本墨書

松平春嶽筆箱書「三友遺墨トハ何ゾ、雪江ノ三友トスルハ水戸藩ノ安島弥次郎後帶刀、同藩茅ノ根伊予之介、及我藩橋本左内也、雪江歿後其子牛介ニ所望シテ譲受ケタリ、予モ左内ハ師友トスル所也。安島、茅ノ根両士ハ余共ニ語りテ素志ヲ同フスル人ナリ、予ノ珍藏不_レ過_レ之ナリ 明治十一年五月十六日 春嶽永」

①安島弥次郎より中根雪江宛書翰、安政五年五月十六日付

②橋本左内より中根雪江宛書翰 安政五年五月二日付

③茅ノ根伊予之介より中根雪江宛書翰 安政五年六月二十四日付

の三通をのせ、最下段に中根雪江筆、文久元年九月福井藩儒矢島立軒撰文の識語が貼りこまれている。

中根雪江が安政大獄にたおれた三人の旧友の書翰を集め、跋文を自らの筆で書きそえて一幅に仕立てたものである。三人の書翰が書かれた時期は、井伊直弼の大老就任によって、事態がこれらの人々の意向に反する方向に動きつつあった頃であるが、内容は日米通商条約締結、將軍継嗣、幕閣の改造などの諸問題について苦慮、奔走した事柄に関連し、極めて重要な史料である。

紙本墨書

松平春嶽跋文「佐久間象山より中根雪江ニ贈りたる書翰、水野筑後守手翰、岩瀬肥後守橋本左内へ贈りたる書状、こたび雪江子牛介より呈す、余ハ此三通をミテ追想往時而不_レ己、距_レ今十六、七年以前也、今日これをミれば水野、岩瀬、雪江、左内ニ面晤スルノ心持せり、余之を跋とす 明治十四年十月 慶永（印）」

（佐久間象山、水野忠徳、岩瀬忠震三名の書翰に右記松平春嶽の跋文を添えて一幅に仕立てたものである。）

一、花木澹齋書翰

一通

紙本墨書

（八月二十三日付、山本木齋宛書翰である。花木澹齋は鴻と名乗り、京都の人、皆川淇園の門人で漢学に精通し、医をも業とした。福井藩につかえ、文久元年五月七十三才で歿した。）

一、尚友書屋記

二枚

木板墨書

（文久三年晩秋の年記があり、表書は「尚友書屋記」、裏書は武田耕雲齋、小松帯刀、三國大学、横井小楠等百七十余名の交名。それぞれに禁獄、刑死、暗殺、自害等の記号を付してある。）

一、元治改元号折紙

一紙

紙本墨書

包紙上書「文久四年三月朔日、大目付溝口讚岐守殿より御渡有_レ之改元之御折紙 月番 稲垣治部」

（折紙の中央に「元治」とだけ記されたもので大目付より触れられたものである。）

一、徳川家達書翰

八十一通（内四通巻軸仕立）

紙本墨書（一部ペン書）

（明治三年十一月十六日付及び明治九年より同二十三年にいたる松平春嶽宛書翰。一部留字中のロンドンからの英文のものも含まれている。徳川家達は文久三年田安家に生れ徳川慶喜が隠居謹慎した際、徳川宗家を相続した。）

一、竹柳正美書翰

一通

紙本墨書

（十一月二十七日付、鈴木準道宛書翰である。）

三、
典
籍

三、典 籍

一、細字周易

三冊一帙

松平定信 紙本墨書

箱裏書「故白川侯樂翁君之親墨細字周易三卦二冊得之於今桑名侯臣宇野右膳者蓋右膳依福山某求信是予家所伝今以窮之故欲驚之然或恕墜于市井中蹤跡或露得罪候家願得某主以奉之公聞是言憫然日嗟為人之臣子忍鬻其先君之所親書者是豈得已而為之哉乃使酬其直如□遂又使製帙與画且親書其簽以藏之且使謂其主右膳□後或願贖旧物使可聽珠還也已時弘化四年丁未夏六月 文学 臣高野進謹識」

(三冊よりなり、一冊は三卦伝義、他は周易卷之一・卷之二である。)

一、百人一首古説等の歌書 七冊

定姫写 紙本墨書

(定姫は福井第十三代藩主治好室。)

- ①百人一首古説 賀茂真淵著
- ②源三位頼政家集
- ③季花集
- ④忠度詠歌
- ⑤曾祢好忠家集
- ⑥松嶋記 山家記 大原記
- ⑦かまくら家集)

一、松平正系図大全附翼並源秀康卿行状 一冊

大原武清・武明 紙本墨書

卷一 奥書「寛文十年庚戌孟秋中旬越前福居隠士大原武明奉_二大守之命_一謹拝撰」卷二 奥書

「越前福居隠士_{大原武清}同子武明_{謹記}」

松平春嶽関係

一、南越雑話

三冊

村純粹叔撰 松平春嶽写 紙本墨書

奥書「此三卷の南越雑話を村田氏寿にかりてみつかから写しける。明治十九年の春より二十年二月一日写し畢りぬ。正二位勲二等松平慶永（花押）」

（寛延元年中に福井藩士村純粹叔が古老の物語りや、自己の記憶をたどりながらつづつた。越前の故事逸話集。）

一、東照宮御文

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「右東照宮御文、元徳川家右筆阿久沢久阿_{称内助}所藏ナリ、余借テ写_レ之_レ実ニ金玉ノノ家訓ナリ、明治十二年五月十九日謹書 東照宮八代孫秀康公十五代裔 正二位源慶永（花押）」

（以下朱筆）此御文乾氏所藏一本アリ、又阿久沢氏写一本アリ、二本ト共ニ阿久沢氏ヨリ貸与ヲ受ク、ヨツテ乾氏ノ方ヲ写ス、朱書ヲ以テ傍側ニ記セシハ阿久沢氏写ノ本ヲ以テ校合スルモノナリ、看者涼之矣 慶永又記」

一、東照宮御遺状百箇條

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

序文「御遺状此百箇條之趣者、東照宮於_{駿州久能山}御自筆之御條目、納_{御宝蔵}御老

一、聖道朱子家訓

中之外拝見無之、於「官役屋」頼記憶書茲□□不可有他見もの也」奥書「御遺訓百箇條他ヨリ借り閲スルニ了解シカタキ所アリ、又衍誤不少、然レトモコレヲ改訂セス原本ノママヲ記載スルナリ、明治十三年六月初四起功同仲四功成 東照宮血統八世孫裔 正二位松平慶永（花押）」

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「天保九戌年七月吉日 松平錦之亟 十一才書」

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「天保十三壬寅年李秋八日 春嶽書（印）」

（十四才の写本。仁説・朱子童蒙須知・訓蒙詩・白鹿洞学規の四編が収められている。）

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「天保乙未八月 錦之亟八才書」

五冊一帙

松平春嶽写 紙本墨書

奥書 第一冊「明治十三年十一月十九日起功 同十四年三月五日功成 正二位源慶永謹書（花押）」 第二冊「明治十四年三月六日起功 同十四年四月廿八日功成 正二位源慶永謹書（花押）」 第三冊「明治十四年五月二日起功 同年九月四日功成 源慶永

（花押）」 第四冊「明治十四年九月五日起功 同年十月二十日功成 正二位源慶永

（花押）」 第五冊「明治十四年十月二十一日起功 同年二月十五日功成 正二位勲二

等松平慶永謹書（花押） 御当家令條五冊三十八卷旧幕府臣川村帰元ノ所蔵ニ係ル宮重

一、司農府規則

更休ヨリ貸借シテ写ス 當時ノ法律ヲ後來ニ照ス必要ノ具ト云ハサルベケンヤ 慶永又「識」

四冊一帙

松平春嶽写

紙本墨書

奥書 第一冊「明治十三年庚辰六月十八日起功 同年七月廿九日功成 源慶永」 第二冊「明治十三年七月三十日起功 同年八月十四日功成 源慶永」 第三冊「明治十三年庚辰八月十五日起功 同年九月十日功成 源慶永」 第四冊「明治十三年庚辰九月十二日起功 同年同月二十六日功成 正二位松平慶永書（印）」

四冊一帙

松平春嶽写

紙本墨書

一、慶政私記

第四冊奥書「明治十二年巳卯九月二十一日起功 同十三年庚辰四月二十五日功成

此書タルヤ徳川麾下中川氏ノ編纂ナリシヨシ世上ニ伝播セサル珍本ナリ、川村氏コレヲ写シテ所有ス、同家元右筆組頭宮重某另久右衛門 今年七十有餘川村氏ヨリ借用ス、余コノ珍書ヲ一閱

シテ垂涎ス、故ニ宮重某ヨリ借用シテ手写スルモノナリ、余コノ一言ヲ卷末ニ記ス、東照宮八代孫 有徳公五代孫 秀康卿十四代裔 正二位源朝臣慶永書（印）」

（慶長五年九月より寛政十二年十月に至る間を、各將軍ごとに條をわけ、上之部・御三家越前家諸大名諸御役諸組・制令金銀御普請・異国雑事の四項目について主要事件を年表風に整理したものである。）

一、翠園叢書

二冊

松平春嶽写

紙本墨書

奥書 第一冊「明治十七年甲申秋七月三十日起功 同年八月二十五日功成 春嶽源慶永書（花押）」 第二冊「明治十七年十月五日写畢 源慶永しるす（花押）」

一、翠園叢書拔萃

①東鑑不審問答 ②新野問答一名有職問答 成嶋鳳卿著 ③青雲図贊 巖垣彦明著 ④小金原御薨記 成嶋仙藏著 ⑤建久四年五月 頼朝公富士野裾野御卷狩日記実録 小林中務大輔記 ⑥梶左兵衛佐定良略記 梶左兵衛佐家臣 小野善助良久記 の六書が収められている。

四冊

松平春嶽写 紙本墨書

奥書 第一冊 「此書冊は鈴木重嶺より借得たるなり、今とし明治十七年三月四日よりうつしそめて同じとしの五月十八日にうつし畢りぬ 正二位源慶永(花押)」 第二冊 「此書冊は鈴木重嶺翁が書あつめたる翠園叢書のうちを借りて写しける 明治十七年七月五日書畢 正二位源あそ慶永(花押)」 第三冊 「明治十三年十一月しるす 源よし永(花押)」 第四冊 「此記は鈴木重嶺より借受けてうつしぬ、中山従一位忠能公の子にして、今の孝鷹の親也、虎列刺に罹りて二、三年前身まかりけり、おのれも此侍従忠愛君ニハ交りたる事もあり、頗麗暴之人也、これにつきてハ意見もあれと憚るところありて記さす、忠愛君のみの仕事にハあらずそかし、明治十七年十月十一日よりうつしはしめ十二月四日うつし畢 松平慶永(花押)」

①大和賊徒退治記 ②紫廻由可理 ③新撰月百首 ④四時の行かひ ⑤泉のひびき
⑥都大路 ⑦本居宣長大人伝 ⑧宣長翁遺言書 ⑨心尽し日記 ⑩三條西季知卿家集
⑪十二月私名考 の諸書が収められている。

一冊

加賀成昂編 松平春嶽写 紙本墨書

奥書 「明治十五年壬午九月十三日起功 同年十月二十日功成 東照宮血統八代之孫秀康公十四代之裔 正二位勲二等源慶永謹書(花押)」 跋文 「余天保九年戊戌冬十一月二十

一、大安公御略伝

一、徳川家御略代記

一冊

松平春嶽写

紙本墨書

三日^一年^十 從田安邸常盤橋邸へ引移以來日夜文学武術ヲ勉強セヨト侍臣專勸装セリ、就^レ中根雪江翁^用余ニ云フ文武ヲ勵ミ玉フモトヨリ当然ナリ、御當家御代々ノ御事蹟ヲ御知悉ナサレヨト懇々ノ教示アリ、加賀成昂等雪江翁ニ相談シ日々秀康公ヨリ齊善公迄ノ御実名御法号御忌日月余ヲシテ暗記セシム、雪江翁親ラ浄光公ノ御行状ヲ書シテ呈ス、其後昇安公ノ明君言動録、徳正公ノ御出語ヲ写サシメテ御忌日又寸暇ノ折、着袴テ拝読ス然ルニ隆芳大安二公賢明ノ君ヲ以テ御事蹟ノ書ナシ、甚遺憾トス、加賀九郎右衛門成昂二公ノ御略伝ヲ編修シテ呈セント余ニ語レリ、余コレヲ喜ンテ賛成ス、依^レ之成昂日夜尽力先大安公ノ御略伝ヲ編ス、天保十三年壬寅三月功成ル浄書シテ呈ス、翌年ニ至リ隆芳公ノ御略伝ヲ編修シテ呈ス、成昂ノ懇誠子孫ニ至ツテモ忘ルルコト勿レ 源慶永又識
(大安公は福井四代藩主松平光通のこと。)

一、隆芳公御略伝

一冊

加賀成昂編

松平春嶽写

紙本墨書

奥書「從明治十五年十一月二十六日起功 至同十六年五月七日功成 東照宮血統八代秀康公十四代裔 正二位勲二等源朝臣慶永謹書(花押) 此書は徳川達孝家從故成瀬正宜氏之所藏本なり、二、三年前岩倉右府之内意を受け徳川令典録編成之節借用せし也、其後成瀬ニ還付之又貸与ヲ乞フ、余是をみるニ原本実読かたく或ハ誤字衍字アリ事實之間違もあり、我祖秀康公之履歴は尤間違多くして見るニ足らず、就^レ中小督局杯は最間違之甚しといふへし、又宣旨も間違あるやニ存したり、撰家公卿実名にも誤謬あるやに被察たり、然れとも此書タルヤ随分見る所ありて未だ見聞せざる事も多くあるを以写置後人之評を乞ハんと欲す 明治十六年五月七日 よし永又識」

一、明君徳光録

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「明治十五年壬午二月二十三日功成 同年五月十二日功成 秀康公十四代裔 正二位勲二等 源慶永謹書（花押）」
（前提「大安公御略伝」跋文にあるごとく、福井藩士加賀成昂の編したものとと思われる。隆芳公は福井三代藩主松平忠昌のこと。）

一、参議齋昭卿御教諭書

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「天保十二年辛丑年十月十日 越前少将（印）」

（松平春嶽、十三才の書。）

一、慶長記

一冊

山路少兵衛入道自休撰 松平春嶽写 紙本墨書

奥書「此慶長記ハ余カ実父ナル從一位齊匡公侍臣ニ命シテ謄写スルノ本ナリ、余父ノ如ク古書ヲ覧閲シテ謄写スル最嗜ム所ナリ、幸ニ田安今徳川達孝ニ請求シ貸与セラル、依テ明治十二年七月一日ヲ以テ起功 同月三十一日謄写ノ功畢ル 正二位松平慶永（印）」

一、白川道之記・楽翁君訓諭

一冊

松平定信 松平春嶽写 紙本墨書

奥書「故從四位下右少将越中守松平定信朝臣後二号楽翁田安中納言宗武卿第七男ニシテ

一、玉函叢説

二冊

田安宗武

松平春嶽写

紙本墨書

有徳廟ノ孫ナリ、宝曆八年十二月二十八日生安永三年三月十一日越中守定邦ノ養子トナル、予カ実家ノ父齊匡卿ノ伯父ナリ、予ニ於テハ大伯父ナリ、君ノ名望ト道德アルハ天下ニ輝キテ其履歴ハ不レ贅ナリ、君養子ニナリ彼家ニ引移リ之節從_レ田安_二数人ヲ被_レ付其中水野左内ナルモノアリ、其孫左内モ君ノ付人トナルヨシナリ付人ハ從_レ実家田安_二被_レ付ヲ云フ本年八十有餘齡、君左内ニ此書付ヲ托シ不用ナルヲ以テ預ケルトノ由左内今ニ珍重保存ス、余此左内ニハ幼稚之頃及当家ヘ引移リノ義ニ就テ格別ノ恩義アリ、今春左内偶来訪此書ヲ余ニ示ス、予瞬時ノ貸借ヲ乞ヒテ記ス、明治十三年庚辰五月三十日起功六月三日功成 正二位松平慶永謹写（印）

一、武道金言録

三冊

村田氏章編

松平春嶽写

紙本墨書

奥書「この玉函叢説てふ文をあらハし給ふはわか実家なる田安從三位中納言宗武卿なりこの君は頗る勤王之志厚く皇国之古典をまねひ給ふ也、此玉函叢説は三十冊以上之ものにして古典音楽其外くさくさといふ、鈴木重嶺翁か田安へねき奉りて歌の部だけをうつしとりたり、是を又余かりてうつしたりき、明治十六年十月二十六日に筆をとりそめて、今とし十七年三月三日にうつし畢ハりたり、田安從三位中納言宗武卿曾孫 正二位勲二等源慶永（花押）」

奥書「村田氏寿先代著述スル所ノ武道金言録ヲ借用シテ觀覽スルニ、徳川家御代々御譜代大名三家ノ臣下當家ノ代々及臣下ニ至ルマテ、詳悉ニ金言ヲ記セリ、実ニ感佩之至ニ堪ヘス、子孫ニコレヲ伝ヘテ後世迄モ子孫ノ教トナランコトヲ望ム 干_レ時明治二十年五月三十一日起功 同年十月五日功成 正二位勲二等松平慶永書（花押）」

一、雨夜乃燈火

一冊

湯浅元禎編

松平春嶽写

紙本墨書

序文「秋雨乃ふりつきぬる夜半に寒灯をあけて古記物語を書集めぬれば是なん雨夜の
灯火ともいふへき 備前国臣 常山湯浅元禎」

奥書「此書は徳川家旧臣旧幕時代右筆組頭相勤し宮重更休翁より借受け写したり、予此
書をみるに後世の教訓ともなるべきもの也、著述せり人ハ末世にして奢侈ニ流れ風俗の
みたるるをことになけきたる事をするしをり当時すら猶斯のことし、今の世を此人に見
せたるならば、さそかし驚きてななく声のたえ間なかるへしと思ハるるなり、予のこれ
を写し置も子孫の教訓にならハやと思ふにて有ける、明治十六年癸未六月うつし畢りぬ
正二位松平慶永（花押）」

一、修身録

一冊

松平定信

松平春嶽写

紙本墨書

内題「白川楽翁教訓書」

一、朱子家訓

一冊

奥書「天保十四癸卯のとし四月十六日より六月二十三日に至りて写畢 源慶永（花押）」

松平春嶽写

紙本墨書

一、魯衛之章愚考

一冊

奥書「天保十三壬寅年正月四日 越前少将（印）」

松平春嶽写

紙本墨書

一、地理初歩

一綴

奥書「天保十四年癸卯十月二十四日写畢 松平慶永春嶽（印） 校合浅井士明（花押）」

松平春嶽写

紙本墨書

奥書「大日本帝国明治十年十一月

Yoshinaga Matsudaira」

(師範学校編纂 明治七年八月改正版)

一、ユニオン・リーダー

二冊

松平春嶽写 紙本墨書

(筆写年代不詳。第一冊レッスン一より四十八まで、第二冊レッスン四十九より七十一までを写してある。)

一、仏垂般涅槃略説教誠経

一卷

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「慶応二年龍集柔兆撰提格嘉平月哉生期写此経一畢 大府侍郎源慶永為彩雲有覚二亡女一(印)」

一、仏説阿弥陀経

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

跋文「愛女安姫以茲仲夏十五日歸真父母茫然如夢、已而知其実悲来填胸愴然嘆息焉、余觀此児生平信佛日到先靈殿數回喜木魚声人扣之、則歡喜且雖白昼令人点佛燈焉、然則此書児蓋有仏縁乎命終在十五日釈迦牟尼寂滅亦在此日惟殊月耳豈不異哉、因為瞻念経一部以修冥福、且作偈日彩雲深処當有十州葉香百里返魂難求花開忽落月亦添愁得清淨觀大覚一

返 應丑閏五月某日 春嶽識(印)」

一、護念経

一卷

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「慶応二年蒼龍集柔兆撰提格冬十一月為有覚院潜營飛仙玉潔女父大蔵大輔源慶永

一、永嘉大師証道歌

書（花押）

一巻

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「慶応二年丙寅嘉年月二十二日源慶永謹書（花押）」

松平春嶽手沢本

一、牛頭天王曆神辯

一冊

平田篤胤 木版本

（全巻、松平春嶽が朱筆をもって傍註・頭註を加えている。巻末には、同じく朱筆で次の様に奥書がある。「牛頭天王のことは我もこれまでは其あやまりを信するたりしか、けふはしめて此文巻をよみてつはらにハきまへたるうれしきにつけても、伊吹の屋大人のいさほは世々に千代万代までも朽ちすそ有ける 万延二年辛酉暁月十八日 春岳（花押）」）

一、俗神道大意

四冊

平田篤胤 木版本

（全巻、松平春嶽が朱筆をもって傍註・頭註を加えている。各冊の巻頭にはそれぞれ「文久紀元辛酉七月読、春嶽朱批」「文久元辛酉七月中瀬 春嶽道人手批」「文久紀元辛酉七月中旬 六有堂逸人春岳観」「文久辛酉初秋中旬 春嶽散人観千水明楼」とあり第四冊奥には「誰もミナ此文をミテ仰くへし うこかぬ靈乃眞柱の大人 慶永」と和歌が付されている。）

一、耶穌一代辨妄記

二冊

田島象二著 木版本

(明治七年四月刊、任天社藏版。随所に松平春嶽朱筆頭註あり。)

一、啓蒙修身録

二冊

深間内基訳 木版本

(明治六年九月刊、和泉屋吉兵衛藏版。随所に松平春嶽朱筆頭註あり。)

一、国忌奠香録・奠香録

二冊

木版本

(安政二年八月刊。芝山聚英堂藏版。)

一、福沢諭吉自著献呈本

八冊

福沢諭吉

①帝室論 明治十五年五月刊 ②通貨論 明治十一年五月刊 ③民情一新 明治十二

年七月刊 ④分権論 明治十年十一月刊 ⑤時事小言 明治十四年九月刊 ⑥通俗国権

論 二冊 明治十二年三月刊 ⑦通俗民権論 明治十一年九月刊 各冊見返に「謹呈春

嶽公閣下 福沢諭吉」と諭吉自筆の書入れがあり、書中には春嶽自筆の朱筆頭註あり。)

一、日々新聞

三綴

木版

(慶応四年閏四月十八日出版の第一輯から、同年六月三日出版の第十二輯、及び「辰五月」とのみある第十三輯までがある。)

一、海軍歴史

九冊一帙

海軍省(付、勝海舟添書翰)

(明治二十二年十一月二日刊 海軍省藏版。左記に示す添書翰に明らかのように、明治

一、亡友帖

二十二年十一月九日勝海舟より松平春嶽に上呈したものである。添書翰「一翰呈上、扱拙著海軍歴史於海軍省出版出来廻送候間、一部進呈仕候、猶一部を村田氏寿子江御廻方御頼申上候、右申上度早々頓首 十一月九日 安芳 慶永様御近習衆」

一冊

勝海舟編 石版刷

（明治十一年二月二日刊 匹田正善藏版 勝海舟宛の亡友の書翰・墨蹟等を収録したものの。見返に松平春嶽自筆で「明治十一年四月十四日 勝先生所贈」とある。）

一、秦会稽刻石

一帖

石版刷

（安政四年七月刊。巻頭に松平春嶽自筆で「愛珍 春嶽書」とある。）

一、戊戌封事

一冊

徳川齊昭 某氏写 紙本墨書

（天保九年八月一日付の幕府への建言書の写である。松平春嶽が家臣に書写させ座右の書としたものと思われる。）

一、寅卯建議

一冊

徳川齊昭 某氏写 紙本墨書

（天保十三・十四年中の建議書の写しである。松平春嶽が家臣に書写させ座右の書としたものと思われる。）

一、丙丁録

一冊

徳川齊昭 某氏写 紙本墨書

（天保十二年六月あらわされた徳川齊昭の史論。我国の諸史籍より、丙・丁の年のみを拾いあげ、その年は古来風水害・早魃等の災害の例が多かったことを論じたもの。松平

一、景山三文

一冊
春嶽が家臣に書写させ座右の書としたものと思われる。

徳川齊昭 某氏写 紙本墨書

（弘道館記・借楽園記・医敵説の三編を書写して一冊としたもの。松平春嶽が家臣に書写させ座右の書としたものと思われる。）

一、農業略記

一冊

松平春嶽写 紙本墨書

奥書「天保十三壬寅年二月二十三日 春嶽書（印）」

（縦九・六糎 横六・七糎の小本である。種まきの時期、収穫の時期など農作業の概略を記したもので、少年藩主の心がけがしのばれる。）

橋本左内関係

一、回天詩史

二冊

藤田東湖 橋本左内写 紙本墨書

（二冊メの前半は、「扶先生方」として、フーヘランドの薬品処方など若干の雑記が含まれている。書写年代不詳。）

一、藜園遺草稿本

一冊

橋本左内 矢島立軒等撰 某氏写 紙本墨書

（藜園遺草稿の稿本で、表紙中央に松平春嶽が朱書で、「明治二年己巳十一月念日即夜桃燈 閱了 春嶽永（大学別当の印）」と書加え、本文中にも朱点を加えている。木版本の原本と思われる。）

一、藜園遺草筆写本

一綴

橋本左内

某氏写

紙本墨書

(礫川文藻二十三号 明治十二年八月十四日の條に「橋本綱常来邸、藜園遺草一部差出ス」とあつて、これがその一冊かとも考えられる。)

一、藜園遺草

二冊

橋本左内

矢島立軒等撰

木版本

(旧福井藩儒矢島立軒等が中心となり、橋本左内の詩文章を編修出版したもの。東京玉巖堂の蔵版で、明治三年十一月刊行された。)

一、夢物語(橋本左内伝)

一冊

石原期幸著

中根雪江写

紙本墨書

(將軍継嗣問題に関して、橋本左内が京都に於て活躍した次第と安政の大獄に倒れるに至った顛末を叙述したもので、安政六年十二月、左内歿後二ヶ月程後に書かれている。著者は通称甚十郎といい、松平春嶽の側向をつとめた人物で、後年種痘掛に選ばれて藩医学向上の為にも尽力した。本書には、中根雪江の序文が付されている。)

グリフィス博士関係

一、THE MIKADO'S EMPIRE 一冊

W・E・Griffis

(一八七六年(明治九)版。初版本。前・後編に分かれ、前編には紀元前六六〇年から一八七二年までの日本歴史が紹介され、後編には日本滞在中の経験・観察・研究等によって得た成果が紹介されている。)

I THE MIKADO

W. E. Griffis

(一九一五年(大正四)版)

一、火技全書図

一冊

榊令輔譯 銅版

(原書は一八二三年、オランダの砲術師セッセレルの著で、榊令輔が訳して安政二年正月に零雨山房が蔵版刊行したものである。)

四、
繪圖・写真

四、絵画・写真

- 一、丸岡藩宇田川町御屋敷絵図 二面
紙本着色 文政三年
- 一、越州鯖江響陽溪真景 一枚
（丸岡藩有馬家の江戸宇田川町上屋敷絵図）
- 一、越前国全図 乾
安藤広重 木版
- 一、越前古図 一面
紙本着色（坤は欠く）
- 一、越前略図 一面
紙本着色
- 一、京阪街道一覽 一卷
（中根雪江旧蔵）
紙本着色 江戸末期
- 一、京都御郭内之図 一面
（中根雪江旧蔵。福井城下より京都・大阪に至る街道全域の宿駅・地形を鳥瞰図風に記録したもの。道中懐中用か。）
紙本着色 江戸末期
- 一、ペルリ―来航関係史料 五枚
木版 文久三年冬京都平野屋茂兵衛刻
（1）来航米人似顔絵 一枚 紙本着色

〔図中説明書き。〕「嘉永七甲寅年正月浦賀表江渡来北アメリカ州合衆国船ノ三番目将ノ

「今般渡来異人之内三番目之大将アワタムスト申者之由、今老人者同人悴ニ而至而美男之由年令ニ拾才位、名前不_レ知」

(ロ) 諸大名相模湾警固配置図 二枚 紙本着色(正副二枚)

(ハ) 海陸御固御場所付 一枚 木版

(袖裏書。「嘉永七甲寅歳正月浦賀湊江亞墨利加合衆国船渡来ニ付江都近海諸候警衛之

〔図〕) (ニ) 諸御大小名御固銘細附 一枚 木版

二十四枚

(イ) 高名手柄揃 覚龍斎播山作

(ロ) 諸国名所旧跡見立鑑

(ハ) 江戸菓子司番付 星塾堂撰 弘化四年十月版

(ニ) 新刀あつ身番付

(ホ) 雲泥くらべ二編 當世堂柳好作

(ヘ) 伊達競

(ト) 新撰古今画家一覽

(チ) 名譽一覽

(リ) 大江戸大将揃

(ヌ) 近世能書鑑

(ル) 嘉永二年役者番付

(ヲ) 近世倚人鑑

一、東西くらべ等版画

(7) 大日本神社鑑 初編

(カ) 源平武者揃

(三) 東都素人浄瑠璃番付 弘化四年

(夕) 宝生流勸進能舞台全図 弘化五年

(レ) 常盤津芸人番付

(ソ) 忠孝昔物語語芸人揃

(ツ) 明治初年書画人名録

(ネ) 名士品題為國家東西番付 文久二年八月

(ナ) 下総道中細見記 尾張屋清七版

(ヲ) 上州草津温泉之図

(ム) 口上茶番十二月噺 林屋正蔵作 五雲亭貞秀画

(ウ) 明治十七年四月、書画雅集

一、御上洛御用掛供奉御行烈付 一枚

木版 文久三年二月(五枚つき)

一、京都御上洛供奉御役人附 一枚

木版 文久三年二月(三枚つき)

一、蜷川親厚所持所々図面

六面

(イ) 御座所御指図(江戸福井藩邸か)

(ロ) 御対面所之図

(図) 中書入「天保十一庚子年元旦、初而比御間ニ而御礼被レ為レ請御酌之進退如レ図。墨字之分諸士御礼式。朱字之分諸役人御礼式。」

(ハ) 江戸表御座之間年始三献御式之図(天保十一年正月)

- (二) 東叡山中凌雲院田安第御祠室図
- (ホ) 上野明諦院之図(天保十一年)
- (ハ) 増上寺図

(嘉永五年十月付の慶永公御代給帳には「表小姓 一高百石 蜷川林右衛門」とある。)

一、福井藩江戸霊岸嶋遠景写真 一葉

(明治初年か)

一、明治初年福井城郭写真 四葉

- (イ) 三ノ丸より撮影の二ノ丸・本丸遠景
 - (ロ) 本丸巽三重隅櫓
 - (ハ) 本丸御廊下橋遠景
 - (ニ) 本丸瓦門及御本城橋
- 十葉
- (イ) 九十九橋(足羽川岸より)
 - (ロ) 九十九橋北詰高札場
 - (ハ) 明新館外人教師居館(異人館)
 - (ニ) 浜町時鐘所
 - (ホ) 西御堂
 - (ハ) 大馬出前(本町出角) 取締出張所
 - (ト) 運正寺福井藩主(十五代齊善) 廟
 - (升) 足羽山招魂所
 - (リ) 灯明寺巖新田塚
 - (ヌ) 番所(場所不詳)

一、明治初年福井城下写真

一、明治初年福井城下旧藩士邸写真 五葉

(イ)岡部豊後邸（敦賀県支庁。高知席 高千五百石）

(ロ)吉江石之助邸（旧江戸下町。徒組小屋頭）

(ハ)大井弥十郎邸（旧天王町。郡奉行高二白石）

(ニ)山本邸（旧江戸下町。表医師） 二葉

一、養浩館（御泉水邸）旧景写真 三葉

（福井第五・七代藩主松平吉品が、郭内に造営した藩主別邸。昭和二十年戦災にて焼失。）

一、福井第三代藩主松平忠昌墓所写真 一葉

（明治三十五年撮影。永平寺境内）

一、松平春嶽・同茂昭 休息、宿泊の旧家写真 二十葉

(イ)加藤河内宅居間 二葉

（福井県今立郡岡本村。嘉永五年九月、春嶽製紙奨励のため出張宿泊。）

(ロ)加藤河内宅全景 二葉

(ハ)専久寺 三葉

（福井県坂井郡泥原新保浦。天保十四年閏九月、越前海岸防備状況視察のため宿泊。）

(ニ)恩地順之助邸 二葉

（福井県坂井郡舟寄村、慶応三年四月、春嶽、生母青松院と共に休息。）

(ホ)その他 十一葉

一、春嶽公記念文庫作成影写史料 七十五面

(イ)越前国大野城破損修復之願（元禄八年八月、大野藩より幕府へ提出の絵図。）

(ロ)忠昌公・光通公御代御城絵図并御家中福井之図

(ハ)福井城下絵図（文政二己卯十二月二十四日写之。天方友成。）

- (二) 酒井外記殿表座敷之図（福井藩家老屋敷）
- (ホ) 狛家邸内図 二面（福井藩家老屋敷）
- (ヘ) 福井城内 御勘定所絵図
- (ト) 慶永公御婚禮御祝儀関係図面 四面
- (チ) 文化三年十月五日 御能拝見鉄炮之間絵図
- (リ) 明和安永頃 常盤橋御近隣の図（福井藩江戸上屋敷近隣の図）
- (ヌ) 靈岸島御屋敷外廻り略図
- (ル) 明和安永頃 常盤橋御家老御小屋
- (ヲ) 文化三年九月 桜馬場乗馬之図
- (ワ) 紅葉山絵図
- (カ) 浜御殿之図
- (コ) 吹上之図
- (ク) 嘉永六年二月御狩場略図
- (ケ) 松岡御家中絵図（享保十五、六年頃）
- (コ) 箱館全図 二面（大野藩主 土井家蔵）
- (ク) 蝦夷地全図（安政二年八月 春樹堂蔵梓）
- (ケ) 江戸湾遠見番所之図
- (カ) 越前国大野郡大井川用水絵図 三面
- (ク) 瑞源寺絵図付寺領山林図 二面
- (カ) 大安寺絵図
- (ウ) 越前国 大野・丹生
坂井・今立 郡御代官所絵図
- (中) 越前国丹生郡織田寺絵図（劔神社）

一、山田長政日本帰航図

(ノ)磯部川筋地割図 二面

(オ)越前国坂井郡為国村、境村、仲筋村、正蓮花村、寄安村絵図 八面（享保十九年三月の図）

(ク)越前四郡支配分海岸絵図 五面

(ヤ)文政七年十一月、稲郷、野中両村、西山村論所決裁絵図並裏書 二面

(マ)吉崎浦周辺絵図 三面（寛永五戊年五月十一日相認改而御上様江奉御覧入候）

(ケ)三国湊絵図 三面

(フ)宮前村絵図

(コ)その他 十八面

一枚

（明治十七年十二月十一日東京地学協会より松平春嶽（同会々員）が受贈したもの。）

春嶽公記念文庫解説目録
— 文書編 —

昭和47年3月初版発行
平成2年3月再版発行

発行所 福井市立郷土歴史博物館
福井市足羽1丁目8-16 ☎35-2845

印刷所 河和田屋印刷株式会社
福井市春日3丁目620 ☎35-3333(代)



鯉雙



福井市立郷土歴史博物館